

(2018 年 3 月 21 日改訂稿)

## 64 「太陽の道」の考古学

### 沖ノ島をとりまく沿海域で発展した太陽崇拝の形式

谷 川 修 (pen name)

#### 緒言

「太陽の道」とは、古代、日本列島や琉球列島の海辺の地先で日の出や日の入りを拝むとき、沖合の島に太陽が宿るように見えることを貴重に思い、やがて、霊性を付加する岩や山などの自然物が聖別する特定の方角をとくに崇拝するようになって、太陽の通る道と思念されたその「道」のことである。同じ思念は、人々が耕作し生活する海辺から離れた平地でも共有された。太陽の宿る島や山と太陽の道は古代人の心性にとって神聖なものとなり、太陽崇拝の一定の形式をもつ“信仰”が形成された。政治体制が形成された後代になっても、それは祭政一致の理念として残り、太陽の宿る島と太陽の道の崇拝は宗教的な儀礼にまで発展した。琉球列島では神殿を建てることはなかったが、日本列島では社殿をもつ神社が建築された。古くから霊地とされた場所をしめ縄や幣(ぬさ)で標しづけることが行なわれたと想像されるが、小共同体の発展の中でそれらは祠や社になったのだろう。そして、現代に続く神社制度から推測すると、律令国家による祭政一致の体制が神社の制度を整えたとき、各地の祠や社は太陽神を頂点とする宗教形式に統一されたのだ、と考えることができる。

本稿は、このような宗教的儀礼の主軸となる「太陽の道」という観念の形成を考察して、最初期の太陽の道が沖ノ島に対して想定されたこと、そして、弥生時代の社会の最先進地域（現在の福岡市・糸島市・春日市周辺）で陸の太陽の道が存在したことを明らかにする。それはちょうど王権が発生し発展した時代で、福岡市・春日市・糸島市で発掘された四つの重要な遺跡（吉武高木遺跡・須玖岡本遺跡・三雲南小路遺跡・平原遺跡）が、王権のあり方に大きな影響を与えた「太陽の道」の存在を証明する。神社や神々や宗教的観念を合わせて議論するのだが、方法は学術的に厳格なものである。すなわち、遺跡という考古学的事実を根拠に、実在する自然物や神社を人文地理学的にとりあつかって、厳密な論理展開を心がけて議論する。思索はホームページ上のエッセイ集に書くことから始まったので、記述はまだそのなごりをとどめているけれども、方法の厳格さを損なっていない。弥生時代に関していくらか新しい知見が得られた。

本稿は平原遺跡 1 号墓の主軸が指す方角について誤りを訂正した（注記 2）。

## 1. 序説

### 沖ノ島を通る太陽の道

今年 2017 年、「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」が世界文化遺産に登録された。登録のタイトルは、沖ノ島を「神宿る島」と呼んでいる。ところが、世界文化遺産となったことを報道する記事中に、そこにどんな神が宿るのかは書かれていない。文化遺産として評価するについて、神の名をうんぬんする必要がないのだろうか。それとも、宗像大社と一体に登録されたので、大社（辺津宮）・大島（中津宮）・沖ノ島（沖津宮）に宗像三女神が祀られていることは言うまでもないということだろうか。先に世界文化遺産に登録された厳島神社も同じ宗像三女神を祀っているが、宮島についても、神の島として崇拝されているという言葉が独り歩きをしている。しかし、それを言う人々がそのありがたい神のことを明確に知っているようには見えない。宗像三女神は天照大神の娘であるということ以外はあまり特徴もない漠然とした神である。沖ノ島に宿るといふ神がいかなる性質の神なのか、尋ねずにおれない。

以前からこの問いに対する答えは、昔見た NHK のテレビ番組と番組のディレクターだった水谷慶一の著書『知られざる古代』にあると思っていた。「太陽の道」という言葉はその書物に登場する（小川光二著『大和の原像 古代祭祀と崇神王朝』の造語という）。これから述べる思索はそこから始まった。わたしは、現代まで残る沖ノ島崇拝が太陽の宿る島とする見立てから始まった、と考える。その見立ては、沖ノ島に残された遺物から考えて、縄文時代にさかのぼることができるだろう。洋の東西を問わず、人間が太陽を偉大と思うのはごく自然なことだ。本州西岸に住んでいた人々は水平線に沈む日を拝むことになる。小高い場所から見た人が、見渡すかぎりの海のかなたに島を見てそこに太陽が沈むのを目撃すれば、強い印象を受けて、沖ノ島は太陽の宿るところと見立てることになる。逆に、対馬の東岸に住んだ人々は水平線に現われる日の出を拝むことになる。その水平線上に浮かぶ沖ノ島から太陽が昇ってくるのを目撃して強い印象を受けた人は、そこに宿っていた太陽が朝になって出てきたという想像に導かれる。沖ノ島を望む海上を航海する人々も同じ経験をして同じ思いを抱く。古代人の心性から、その見立ては壱岐・九州北岸にも広まり、対馬・壱岐・九州北岸・本州西岸に通用するものとなっただろう。このように考えるとき、沖ノ島に宿る神は太陽で、沖ノ島の祭神とされる田心姫（タゴリヒメ）は神の役割を果たしていないことを知る。むしろ、太陽神に仕える巫女ではないかと思われる。

寒暖と季節の認識は、太陽の昇る方角・沈む方角と太陽を仰ぎ見る角度と関連させて、人が古くからもっていたはずである。夏至と冬至で年を数えることが、日本列島に残る「盆と正月」の起源にちがいない。農作物の栽培が盛んになれば、太陽崇拝は生業に結びついていっそう実地的な思念になる。農作業の必要からも季節の節目を細かく識別することが重要になると、冬至と夏至の中間点である春分と秋分も特別の日になった。やがて、その春分・秋分の日、太陽が長門二見の夫婦岩のちょうど真西にある沖ノ島に沈むのを知る人が出る。すると、夫婦岩は、太陽神の宿りを遙拝する

標識となって神聖な場所になる。対馬の側でも同様のことが起きて、対馬根緒の大小二つの岩礁神ノ島と上・下の根緒島が、春分・秋分の日に出を拝む標識になる。神ノ島（ごうのしま）という名はそれを表示しているのだ（根緒の語根の「根」は、大地からの太陽の出入に関連する意味をもつのかもしれない）。こうして、長門二見の夫婦岩から沖ノ島を通して対馬根緒の神ノ島に至る一筋の「道」が意識されることになった。やがて、それは聖別された「太陽の道」という観念に高まる。

図1に、国土地理院の地図を示そう。沖ノ島の一ノ岳三角点は、北緯 34.244 度に位置し、標高 244m である。長門二見の夫婦岩は北緯 34.243 度に、夫婦岩と呼んでもおかしくない対馬の神ノ島は北緯 34.252 度に位置する（上・下の根緒島の方が沖ノ島の緯度に近い。沖ノ島はある程度の広さをもつ）。緯度を細かい数値まで記すのは、0.001 度の精度で事態を見究めるためである（緯度の差 0.001 度は南北の距離にして約 111m に当たる）。長門二見の夫婦岩・沖ノ島・神ノ島は、ほとんど同一緯度線上に存在する。これは自然の偶然である。けれども、古代人が、東西にある“夫婦岩”を鳥居とも見なして沖ノ島に沈みあるいは昇る日を拝めば、自然がこの東西線を聖別したという思いを抱き、「太陽の道」という観念に高めてもおかしくない。

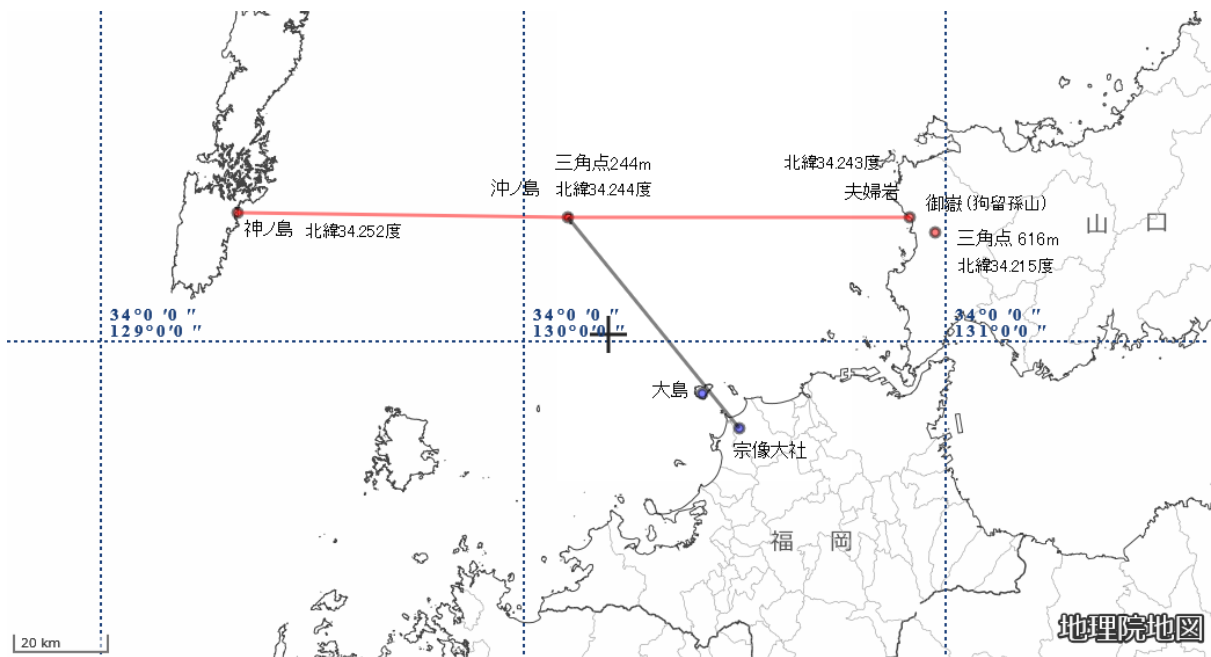


図1 沖ノ島を通る東西線と沖ノ島と宗像大社を結ぶ線。

その東西の線から少しずれるが、長門二見の夫婦岩の後方に御嶽（おだけ、狗留孫山、北緯 34.215 度、標高 616m）がそびえる。重要なのは、三角形の峰をなすこの高い山は沖ノ島付近の海上からよく識別できることである。海上を航行する人々にとって、方位を見定める大切な役割を果たしたにちがいない。また、この山頂からなら沖ノ島全体をはっきりとらえることができる。しかも、山中に陰陽の巨石がある。これが磐座（いわくら）として古くから霊性を帯びるものと見なされたことも確実だ（現在そこに寺院がある。伝承が筑前沖の海上からこの山が見えたことを証言する）。御嶽・

夫婦岩・沖ノ島のセットは、ちょうど、あとで述べる琉球の斎場御嶽・浜辺の三つの岩・久高島のセットに対応する。狗留孫山という仏教の影響を受けた山名は新しく、もともと「おだけ」と呼ばれていたと考えられる。太陽の道を意識してのことにちがいない。ここには、たしかに「太陽の道」崇拝がある。ここまで言い忘れたが、沖ノ島には磐座があって、古くはそこで祭祀が行なわれたことが考古学的調査で明らかになっている。沖ノ島の写真は、島全体が巨大な磐座と呼べるような外観を示すことを教える。

今日までの沖ノ島崇拝は、そこに太陽神が宿するという思念が沖ノ島をとりかこむ本州西岸・九州北岸・壱岐・対馬で共有されたことに始まる、と結論してよいだろう。響灘と玄海灘を航海する人々にとって東西・南北の方向は必須の知識だが、太陽の道はその東西線を教えるのでもある。西日本で天の原という言葉が最もふさわしいのはこの海の上に広がる空だろう。その言葉は広い海原を連想させ、「アマ」が海をも指す言葉になるのは自然なことだった、と思われる。そこを天の原と見立てれば、巨大な磐座と見える沖ノ島は天の岩屋だし、太陽神がその岩屋の中に宿るのだから、琉球久高島の「クボー御嶽」のように穴が開いているはずで、天の岩戸とも呼べるのだ。

ところで、沖ノ島の祭事を行なう神社は宗像大社である。図1に見るように、たしかに、宗像大社は大島（中津宮）・沖ノ島（沖津宮）と一直線に並ぶ。しかし、宗像大社から沖ノ島は見通せない。しかも、宗像大社あるいは大島と沖ノ島を結ぶ直線は東西線から約50度の角度をなし、冬至から夏至に至るどの季節にも、沖ノ島の方角に太陽は沈まない。宗像大社の方からは、太陽が沖ノ島に宿るようには見えないのである。この事実は、「沖ノ島は太陽神の宿る島だ」という通念の確立したあとになって宗像大社がそこに建てられた、と証言する。宗像大社が沖ノ島の遥拝所になるのには理屈づけが必要である。これは解明されるべき問題である。

## 琉球の久高島を通る太陽の道

太陽の道という観念は、明治維新の際に琉球王朝が権力を失うまで現実に機能した。2000年ユネスコが世界文化遺産として認定した「琉球王国のグスク及び関連遺産群」のうち、他の城跡と庭園を除く、首里城跡・園比屋武(ソノヒャン)御嶽石門・斎場御嶽の三つは、今議論している太陽の道を構成する要素である（沖縄では、御嶽を「ウタキ」と発音する）。登録された文化遺産には最重要なスポットが欠けている。じつは、首里城と二つの御嶽は、沖縄本島東方の海上にある久高島を遠望するという一点で関連しているのである。琉球列島で、「太陽の道」崇拝は明確に人々の行動を律していた。古い形態を保っていたその形式や儀礼は、日本列島古代の太陽の道を考えるのに有用な参照例となるので、簡単に整理しておこう。

まず、図2に示す地図を見ながら地理を説明しよう。久高島は、沖縄本島の東方およそ6kmの海上にある。沖縄本島東岸には、太陽が久高島から昇るように見える一帯がある。しかし、そこで聖別された太陽の道は緯度線に沿うものとならなかった。

理由は、久高島に最も近い知念半島に寄り添うように立つ巨石があったからである。つまり、そこには自然崇拝の対象となる磐座があった。世界文化遺産を宣伝する写真が、その斎場御嶽が霊場であることをよく説明する。海岸から 400m 足らずのところであり、標高は約 95m。しかも、渚まで下りれば目の前 30m の海中に三つの巨岩が立ち、その岩の向こうに広がる大洋にぽつんとある久高島が見える。岩は夫婦岩と呼ぶには子があって少しさしつかえがあるかもしれないが、かなたの太陽の宿る島を拝む鳥居の役目を立派に果たす。斎場御嶽の場所は、大洋に浮かぶ島から昇る日の出を拝むのに最もふさわしい地先なのである。王朝が成立するはるか昔から沖縄本島で重要な霊地だったにちがいない。

サンゴ礁だらう久高島が斎場御嶽下の渚から見えるか。国土地理院が久高島に設置した三角点の場所は標高 17.5m、これなら 15km 離れた海上からでも見える。だが、地図をさらに詳しく見ると「クボー（フボー）御嶽」のあたりに等高線が書いてある。標高を出してみたら 21m。すなわち、斎場御嶽の渚から大洋を遠望すると、クボー御嶽を高めとして久高島の島影が見えるのである。季節が合えば、クボー御嶽から太陽が出てくると見えるだろう。太陽を崇める古代人の心性にはそこが太陽の入っている「穴」と見えた。図が示すように、斎場御嶽・渚の三つの岩・クボー御嶽は一直線に並ぶ。先ほどの狗留孫山御嶽・夫婦岩・沖ノ島との対応は明らかである。これが、琉球で元来の太陽の道だっただろう。

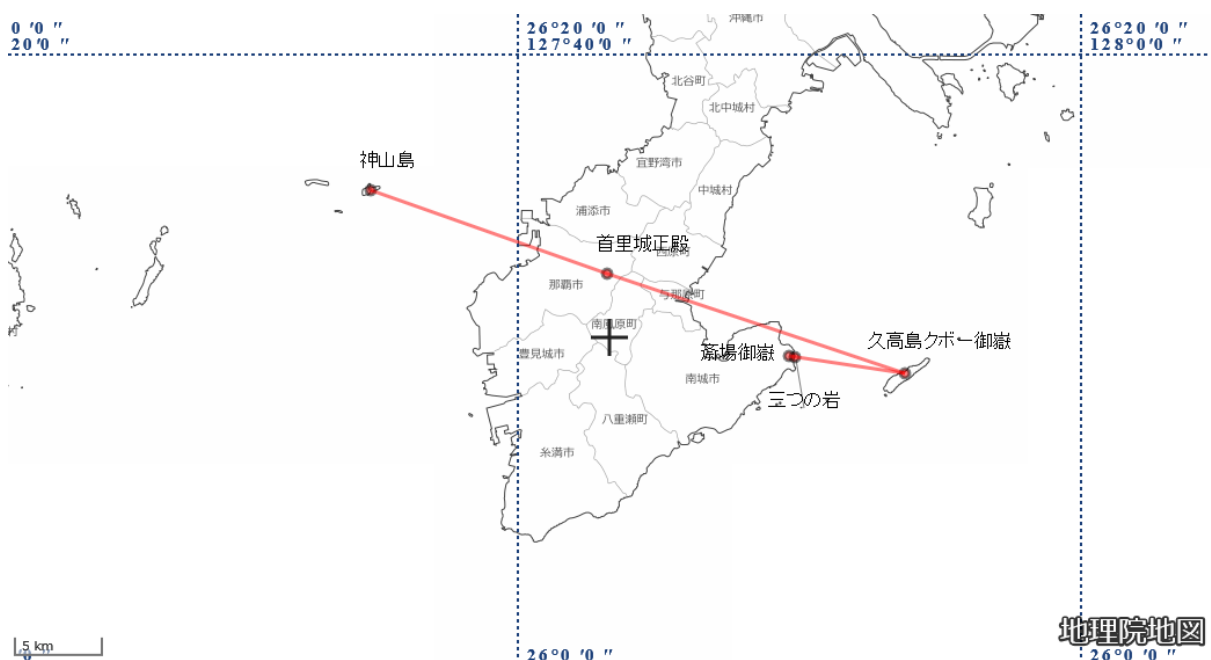


図2 首里城正殿琉球王宮を通

琉球国が成立したとき、海洋国家の国都は 4km 近く内陸に置かれ、宮殿は、祭政一致の国内統治を重視して、久高島を見通すことのできる標高約 126m の丘に建設された。王宮と久高島クボー御嶽を結ぶ直線は、斎場御嶽・渚の三つの岩・クボー御嶽の線からずれるが、王宮を通るこの直線が新たな公式の太陽の道と制定された。国王

が宮殿で「太陽の道」の祭祀を主宰することによって、伝統的信仰の力をとりこみ統治を安定させるためだっただろう。もちろん、国王を含めて人々が太陽の道を尊崇していたからでもあろう。

王権によって制定された太陽の道を、地理院地図で測定してみよう。園比屋武御嶽石門から斎場御嶽を通して久高島へ伸びる直線を引くと、その直線は久高島をはずれてしまう。その上、園比屋武御嶽石門の標高は 111m で、120m を超える位置にある王宮にさえぎられて久高島を見通せない。そこで、王宮正殿から久高島のクボー御嶽へ直線を引いて、正殿からクボー御嶽が見えるかどうか地図を拡大して調べた。線上の正殿近くに 5m ばかり盛り上がったところがあるがその先は下って海岸に出て、知念半島では斎場御嶽のある山塊の北の海岸近くを通っている。正殿の建物からならクボー御嶽を見ることが可能だ。王宮はそういう場所を探して建てられたと考えられる。園比屋武御嶽石門はあとからつくられたのだろう。正殿とクボー御嶽を結ぶ直線が緯度線となす角度は、分度器で測って約 +20 度で、首里王宮で冬至の日の出が見える角度 26 度よりも小さい。王宮正殿から久高島を望んでクボー御嶽付近から太陽が昇るのを見ることができるのは、十一月中旬のことだろう。山の尾根に隠されて見えない斎場御嶽はこの直線よりも南にある。王宮正殿の棟の方向はなぜかわずかに南北の線から傾いて建てられているが、グーグル・マップの航空写真で見ると、色分けされた通路は正殿入り口から前庭広場を真西に伸びて神奉門に至る（王は南面するのではなく西を向くことになる）。門の外、通路の延長線上 20m ぐらいのところに小さな首里森御嶽がある。神奉門の先にあるこの御嶽は日没時の太陽神を拝むための施設と考えてよい。琉球王は、久高島の方角だけでなく、春分・秋分に太陽の通る道を尊重していたことになる。細かいことにこだわっているように聞こえるだろうが、王の政府は太陽神の祭祀のためにそれほど注意深く施設を配置したのだ。宮殿の外の首里森御嶽の近くに漏刻門がある。そこには漏刻が置かれていた。王は時を管理するのもである。さらに注目すべきことは、久高島から首里王宮を通る太陽の道を延長すれば、王城から約 14km 西北西の海上にある島に至る。島の名は神山島である。これも、沖ノ島を通る春分・秋分の太陽の道の西に神ノ島があることに符合する。

これほど方角を意識しているのに首里城正殿の棟の方向は南北方向からずれている。何か理由があるにちがいない。そう思って地理院地図で磁北の方向を表示してみると、地磁気の偏角は首里城の場所で -5 度 0 分、棟の方向に一致する。どうも地磁気の方角に合わせて建築したようだ。だが、琉球統一と第二尚王朝の継承は 1400 年代中ごろまでのことである。まだヨーロッパ式の羅針盤はもたらされてはいない。この問題はさらに考察が必要のようだ。

琉球王朝が成立すると、それまでの雑多な信仰は太陽神を中心とする御嶽信仰に集約され、さまざまな様態だった神に仕える巫女も祝女（ノロ）の制度に整理された。政治を執行する王に並んで、聞得大君（きこえのおおきみ）という最高位の祝女が置かれた。聞得大君は、琉球で最重要と位置づけられた斎場御嶽および王城内に設けられた十の御嶽の祝女を務め、国土を守護するのである。この信仰体系の最大の儀礼は、

初期、王と聞得大君が神の島である久高島に渡り礼拝することだった。やがて、久高島に渡らずに、斎場御嶽で久高島を遥拝して祭祀を執り行うことに改められた。さらに 1600 年代後半に、国王代理が遥拝を行なうことになったという。注意すべきなのは、琉球では祭神を祀る神社は建てられなかったことである。

久高島には、現代人からすると神秘的な「イザイホー」という祭事があった。島の女性（祝女）たちが、秘事として男子禁制とされる久高島の霊場「クボー御嶽」で行なった。時期は十二年に一度旧暦 11 月 15 日からの六日間（冬至のころ）という。印象の強い一年の節目が太陽崇拝の祭事にとりこまれているのだろう。太陽の復活を祈るか祝わった行事に淵源があると思われる。琉球の神話は『記・紀』神話に似ていると聞くので、日本列島からの影響があったと考えられる。固有の説話がどのようなものだったかは慎重に見究める必要があるだろう。

聞得大君は、王の姉妹など王族の女性から選ばれた。これは、『三国志魏書東夷伝』の、倭の女王卑弥呼が鬼道に仕えたという記事に符合し、伊勢の皇大神宮の斎宮が皇室から選ばれたこととも一致する。日本列島と琉球列島で、共通する自然崇拝の形式と態度があったと考えることができる。それが、よく似た太陽の道の崇拝を生んだのだ。ちなみに、琉球でも、神事に際し浜辺の真砂を採集したそうだ。それは、福岡県の神社が今でも行なう「お汐井とり」の慣習である。狗留孫山御嶽・夫婦岩・沖ノ島のセットと斎場御嶽・浜辺の三つの岩・久高島のセットが太陽の道の発生期の形態だったすれば、琉球では王国が成立したとき、それが王の主宰する制度的な「太陽の道」に修正されたのである。

この節で留意すべきことは、太陽神の宿る島という思念は、『知られざる古代』が言うように、元来、見晴らしの良い地先から海上の島に太陽が沈むもしくは太陽が昇るのを見て生まれたということである。もう一つは、磐座をもち霊山と見なすことのできる山＝御嶽から日の出や日の入りを礼拝する儀礼が発展したということだ。

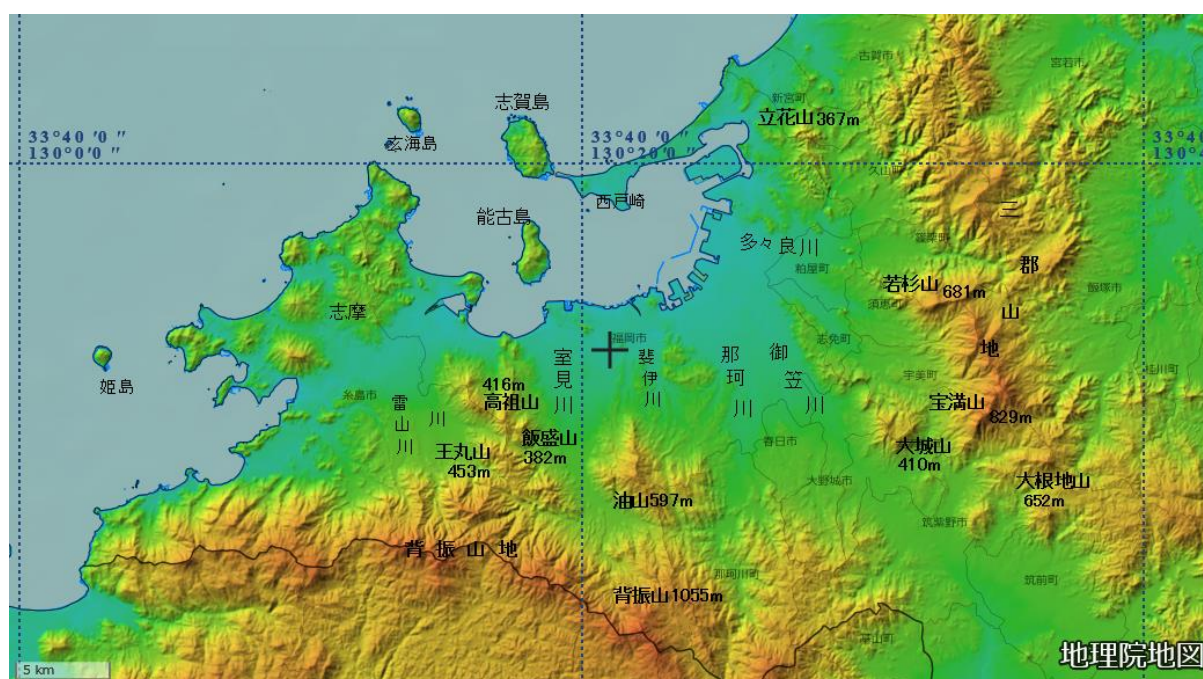
## 2. 地理、暦、方位

### 「博多湾・糸島水道」沿海地域の地理

自然崇拝の対象に名を与え意味づけをして説話が生まれる。そうして、神々と神話がつくられていく。ところで、『古事記』と『日本書紀』に記された神話は、太陽神を中心とする物語に体系化されている。『記・紀』の編まれた近畿地方にそれらの神話にまつわる神社が多いのは、人間の習性からして理解できる。しかし、『日本書紀』は幾種類もの『一書』の内容を記して、『記・紀』編集以前に、古くから口承された“古形神話”が加工されてさまざまな説話に膨らんで書きとめられていたことを教える。しかも、『記・紀』自身が、九州から来た集団が奈良盆地の首長権を獲得したと語り、九州とのつながりをむしろ主張しているから、大和で編集された神話が九州で生まれた説話を多くもつ可能性が高い。実際、沖ノ島を中心として「太陽の道」とい

う観念が形成されたことを論証した前節の議論は、太陽神が宿ると思念された沖ノ島こそ、『記・紀』神話が太陽神について語る「天の岩屋」にふさわしいことを示す。つまり、『記・紀』の「太陽神」神話は、沖ノ島をとりかこむ本州西岸・九州北岸・杵岐・対馬の沿海部でつくられた、と考えることができる。

この地域の古地理を、地理院の地形図（図 3）を参照しながら概観しておこう。博多湾岸の東を区切って立花山（367m）から南の若杉山（681m）を経て太宰府北東の宝満山（829m）まで三郡山地が続く。福岡市の西を区切るのも、高祖山（416m）から南の背振山地までつらなる山並みである。博多湾岸の南に、大きな単独峰をなす油山（597m）の山塊がある。その背後に、背振山（1055m）を主峰として東西につらなる背振山地（山脈）がある。油山の東南には、背振山地が北東に張り出して尾を引き、御笠川が北流する地峡を挟んで東には大城山（410m）がある。大城山の東が宝満山である。



とができる。板付遺跡は御笠・那珂の水系にある。さらに南に須玖岡本遺跡がある。特筆すべきなのは、現在の博多駅の南まで大きな入江だったことである。住吉神社がその海辺に建っていた。この入江は西の丘陵地で限られる。その丘陵の北端部にのちに鴻臚館が建てられた。

一番西が室見川の水系である。南北につらなる高祖の山並みの東に張り出して秀麗な円錐の山頂をもつ飯盛山（382m）がそびえる。その真東の室見川左岸の河岸段丘で、日本列島最古の“王墓”と目される吉武高木遺跡が見つかった。飯盛山のふもとの吉武を東北へ流れて室見川にそそぐ支流は、日向川と呼ばれる。

高祖連峰の西側には糸島市の平野が広がる。南には背振山脈が東西に走って境界をなし、北流するいくつかの川が平野を潤す。平原遺跡のある低い丘陵の西に雷山川が北流し、その丘陵の東側にも北流する二つの川の形成する水系があり、そこに三雲南小路遺跡がある。地理上最も重要なのは、鎌倉時代以前、博多湾から西の唐津湾まで船が航行できる水道でつながっていたことである。糸島水道の北は志摩つまり島で、南が怡土（いと）である。

海には、博多湾頭に「漢委奴国王」と彫られた金印の出土した志賀島がある。今ではほかに能古島しかないが、古くは、志摩＝島の東南端もほとんど独立した小島だったらしい。海の中道でも西戸崎は島状だっただろう。大きな志摩の西には姫島があり、博多湾口の外に玄海島がある。これらの島々には人が居住している。古代、この海は多島海だったのである。

それでは、こういう地形をした地域で、太陽神やほかの神はどのように祀られたのだろうか。ここで、自然崇拝の時代には、崇拝対象や霊場に特別の社殿はなかったことに注意しなければならない。たとえば、長門二見の夫婦岩に社殿はつくられず、今日までしめ縄が張られるだけだ。社会の発展につれて、霊域と表現する標識が立派になっていったのだろう。神々のイメージがつくられ関連づけられ、神話が体系化されていった、と考えられる。それは、水稻栽培に基盤を置く社会が日本列島西部に展開する中で起きたことで、人々の移動とともに神々も各地に移動し、神々と神話の体系は複雑化した、と考えられる。水稻栽培の始まった紀元前 800 年代から、日本列島西部にかなり広域に覇権をもつ王権がいくつか成立するまでに、およそ一千年の年月が経過した。社殿に祭神を祀る神社の形式が律令国家の成立によって完成したとき、政府による各地の神社の格付けが祭神名の変化までもたらしただろう。神の勧請ということも行なわれるから、その後も、各地に存在する神社に変化が起きただろう。こういうことを考えると、現代、神々と信仰の古形を探ることはむずかしいことである。それでも、次の節ではそれを試み、『記・紀』神話の痕跡を最先進地域だった博多湾岸と糸島に探し、太陽崇拝がどのようなあり方をしたか探ってみよう。

## 暦と方位の認識

序説の議論で、すでに春分・夏至・秋分・冬至が知られていたことを前提にしたが、太陽の道を考える場合、暦と方位の知識が重要である。そのことに注意をはらうため

に、ここでもう一度触れておく。日本列島に水稲耕作をもたらした人々は、暦の原理を知っていたと考えてよい。正確でなくても、それぞれの生活の場所で、日の出と日の入りを観察して冬至と夏至を認識し、月の満ち欠けを観察し、日にちを数えて、年の巡りを知っただろう。夏至と冬至を起点に日にちを数え、中間点の春分・秋分を識別することは、農作物を育てるための必須の知識だった。それは、日の出・日の入りの方位の観測でもあった。そういうことが、太陽を敬う心持ちと不可分に結びつき、太陽の道という観念を生み出したのである。

日本列島でいつごろ日時計が使われるようになったか知らないが、早い時期からそれがあったと考えてよいだろう。日時計は、影の長さで太陽の南中つまり正午を教えて、南北方向とそれに垂直な東西方向の認識を与えてくれる。王権が確立して王の住居が築かれるとき、建物の主軸にこだわるなら、日時計と原理を同じくする器具で方位を求めて縄張りの作業が行なわれただろう。ある場所でのそういう作業は、太陽の南中と日の出・日の入りを見て方位を見定めることと結びついて、方角の感覚を鋭くしたと考えられる。そういう習慣の中で、中国や日本の王宮は南向きに建てられるようになった。首里城正殿の棟の軸が南北方向からわずかに西に傾いていることを序説で指摘したが、この問題を無視してはいけない。続編で議論しよう。

### 3. 博多湾岸の始原の神話、吉武高木遺跡と須玖岡本遺跡、太陽の道

#### 説話のはじまり

金印の出土した志賀島には海（ワタツミ）神社がある。祭神は文字通り海の神である。原初から人間は太陽や月や海や山などに畏敬の念を抱いた。ここの素朴な神の名は、そういう自然崇拜に始まることを示している。その海の神は、もともと、対馬・壱岐・九州北岸・本州西岸の文化圏で海を生活の場とする海人（アマ）たちに共通の心情から結晶化したのだろう。志賀島の海人は阿曇（アズミ）という氏族で、政治制度が整えられる中で海人をたばねる職掌に就いた。それは、今考えている博多湾・糸島水道周辺の地域で起きたことだっただろう。阿曇氏につらなる海人たちは日本列島の各地へ渡りそこに住みついた、遠く内陸の信濃まで行った集団があってそこに安曇野という地名を残すほど。

志賀島に祠が建てられた時代に、その神が神話の体系の中に位置づけられた、と考えられる。『記・紀』では、抽象的な神代の神々の最後に、イザナギ・イザナミの夫婦神が登場して、国々を産み、神々を産んだとされる。海の神（大ワタツミ）や山の神（大ヤマヅミ）などの自然神はそこに含まれる。イザナミが死ぬと、イザナギは黄泉の国まで行く。そこから説話が続き、神々が生まれたとされる。さらに、黄泉の国から帰ったイザナギが、筑紫の日向のたちばなの小門のあはきはらでみそぎをしたとき、底津海神・底筒之男神、中津海神・中筒之男神、上津海神・上筒之男神やほかの神が生まれ、最後に日の神・月の神・スサノヲが生まれて、説話が閉じられる。『日本書紀』の記述は『古事記』と異同がある。『日本書紀』に引用される『一書』群も、

説話がさまざまな語り方で伝承されたことを明かしている。海の神と対で提示される筒之男神らは、イザナギが黄泉の国から帰ってきたところで登場するから、黄泉の国＝根の国との境を表象させる渚の神を意味するのだろう。

神話が複雑に構成されているのは、語りの多様化だけではなく、それぞれの神を信奉してきた氏族や部族が、自分たちの説話を体系の中に位置づけることを求めたからだろう。自然神から分化して神々はとても多様だが、スサノヲは人間を神化したように見える。日の神も天照大神と呼ばれて人間に近づいた。そこには、政治的な力が働いたと考えられる。自分たちの氏族の祖先を太陽神につなげるためにそう唱えた有力者があったのではないか（たとえば、ユリウス・カエサルの家はローマ神話の最高神ユピテルを祖先とする氏族とされる）。日本神話は三という数字を神聖とするのか、海の神は、底津海神・中津海神・上津海神の三神にされ、志賀の海神社は三つの社殿をもつ（住吉神社も宗像大社も三神）。志賀海神社では、それぞれの相殿に玉依姫・神功皇后・応神天皇も祭られているようだ。玉依姫は『記・紀』に神として登場するが、多くの神社で主神といっしょに祭られ、神霊を宿す巫女だという説がある。神功や応神の方はあがめられた人間である。この形式は祭神についてヒントを与える。元来、神は自然神にさかのぼれる精霊で、巫女が仲立ちをしたのである。神話ができ、社殿が建てられるようになって、そこに祀る祭神が複雑化したのだ。

福岡の住吉神社は、大阪の住吉大社にかなわないが、御笠・那珂水系のかつての入江の海辺に建てられ、この地が水稻栽培の始まった時代から最先進地域だったことからして、筒之男神の三神を祀る最も古い神社である蓋然性が高い。ところで、志賀海神社の三神も住吉神社の三神も、「筑紫の日向(ひむか)のたちばなの小門(おど)のあはきはら」で生まれた。それに対して、読み方は違うが室見川の支流に日向(ひなた)川がある。その川の流れる飯盛山のふもとは日向という地名をもっていたのだ。そこから6 km余り北の海岸へ突き出た所へ行くと、西北端に高さ39mの小山がある。その地名は小戸(おど)である。地名をたよりに神話に出る「筑紫の日向の小門」というのはここだという説があるが、判断は保留しておこう。それでも、きわめて古いと考えられる志賀海神社の三神と住吉神社の三神が、最初、筑紫の中心地である博多湾岸で語られた説話に登場した可能性は高い。

博多湾岸の地理で名を挙げたのに、以下の議論で神が登場しない山がある。湾頭の志賀島から南方を望むと、大きな山塊をなす油山が目に見えこむ。そういう「お山」の北麓には海神社しかない。油山の名は、六世紀に渡来した上人が建てた寺で初めて椿油を採ったことに由来すると言われている。しかし、仏教伝来のはるか以前もっとふさわしい名があったのではないか、前から疑問に思っている。油山の後方には九州北岸の最高峰背振山がある。頂上の神社は背振神社で、高い山の祭神がなぜか宗像三女神の一人市杵島(イチキシマ)姫。じつは、江戸時代、福岡藩と佐賀藩とが境界を争い、幕府の裁定で山頂は佐賀領になったのだ。背振神社下宮は佐賀側にある。ところが、山頂東の福岡側の集落には山神社がある。神社の名は素朴でれっきとした山の神だと教える。祭神は大山積(オオヤマヅミ)命。志賀島の海の神に対して、山の神

はここに祀られたのだ。背振山にイチキシマ姫が祀られたのは、油山よりもこちら的高峰が沖ノ島を遥拝する場所に適していたからだろう。月の神を祀る神社を博多湾岸に見つけることはできなかった。

### 吉武高木遺跡と飯盛神社

それでは、考古学的事実に支えられる神社を採り上げてみよう。室見川の左岸、博多湾から6kmほどのところに、日本列島最古と目される“王墓”の発見された吉武高木遺跡がある。インターネット上の文化庁国指定文化財等データベースを見れば、その重要性が判る。吉武の遺跡群は、縄文時代から中世にかけての大規模なものである。吉武高木遺跡はその南端部にあり、とくに高木地区の墳墓群は一般の墓地と離れて独立した墓域をなし、上に墓石を置く木棺墓四基と甕棺墓七基から、同時代のほかの遺跡に卓越した青銅器・玉類などの副葬品が出土した。中でも、最大の木棺墓の墓壙は4.8m×3.5m、もう一つの木棺墓は三種の神器「鏡・剣・勾玉」を含む他を圧倒する青銅器を副葬していた。それらはまだ孤立した墳丘と石槨をもたないけれども、王墓の原型と見なすことができる。青銅器を副葬した墓群の東40mの地点に大きな掘立柱建物（同時期の建物として最大12.5m×9.5m）、その南40mに高倉倉庫七棟。この区域に集落をなす竪穴住居は見つからないので、その建築群の区域は首長層の居住域だったと考えられている。最初期の“王”がいたと見なしてよいだろう。

大型建物とその西の首長一族の墓群の真西およそ1.9kmにそびえるのは飯盛山である。“王宮や王墓”は飯盛山を通る東西線を意識して設置されたと考えられる。“王”は、春分・秋分のころ、飯盛山に没する夕陽を拝んだことだろう。飯盛山は、中世まで山全体が崇拝の対象だったところで、現在の登山コースを見ても百貫石や迎え石などと名づけられた巨石が散在し、縄文時代から磐座をもつ霊山だったと考えられる。首長の権力が王に近づいた時代までに、その山の崇拝はどのような神と説話を生んだだろうか。山の名は、山の形が飯をもった形なので飯盛山。当然、水稻が栽培されるようになってついた名だ。その山の名が神社の名である。飯盛神社も、上宮・中宮・下宮の三か所に拝礼所をもつ。現代の地図で確かめると、飯盛山頂上の三角点は精確には吉武高木遺跡の真西になくて、上宮跡の方が真西に当たる。上宮は王宮と王墓の真西に建てられたのだろう。のちの時代の影響を受ける副神のことは省略する（福岡市文化財の説明と神社のホームページの由来とのあいだに錯誤がある）。ここでは神仏習合の影響もあるが、それも無視しなければならない。さて、主神の名はイザナミ、由々しい神だ。国々を産み、神々を産んだ母である。神話ができあがって、霊は神として名をもつようになり、王がその祭祀を主宰して最高神との関係を占有することが起きたのだろう。

夫のイザナギはどこにいるか。社伝は、そこから東北東に約23km、多々良水系の東を限る三郡山地に属する若杉山だと答える。若杉山の山頂と中腹とふもとに社殿をもつおごそかな名の太祖神社がある。たしかに祭神はイザナギ。若杉山も磐座をもつ

霊山である。のちに修験道の尊崇の対象になり、北麓の篠栗ではお遍路さんが今でも巡る。すなわち、博多湾岸の平地を見晴るかす東西二つの霊山が、国を産み神々を産んだイザナギとイザナミになったのだ。飯盛山と若杉山を結ぶ方向に意味があるようには見えない。水稻栽培の始まるよりも前から東西の霊山を関連づける崇拜があって、海神社に発展する海の霊に対する崇拜と同様に、相対する二つの霊山が一对の神のイメージをつくりだしたのだろう。水稻耕作の社会が発展する中で、飯盛山の日の入りを拝む習慣が強まり、その地で首長権を掌握した“王”が、飯盛山の真東のよい場所に埋葬されることを望み、あるいは住居を建てるようになった、と考えることができる。その王権が続き権威をもつようになると、霊山を通る太陽の道に権威が付随して崇拜されるようになっていく。

### 須玖岡本遺跡と熊野神社

弥生時代中期から後期にかけてと推定される時代の大規模な遺跡が、御笠・那珂水系の南部丘陵地（現在の春日市）で見ついている。須玖岡本遺跡群である。吉武高木遺跡よりも発展した社会を示すたくさんの出土物が発見された。青銅器・ガラス・鉄器生産の工房跡や鋳型までみついている。そういう地区で、明治時代、二つの巨石が置かれた盛り土状の場所から甕棺が見つかり、「鏡・剣・勾玉」など数々の遺物が出土した。「巨石下甕棺墓」と呼ばれているが、出土物から判断して、この“墳丘墓”は王墓だったと考えられている。十分な学術調査が行なわれなかったので不明な点が多い。横たえられた大石の向いていた方向は不明で、立っていた石は被葬者の頭の後方に設置されていたのだろうと推定されている。

考古学的知見の詳細を述べるゆとりはないから、その地にある熊野神社に話を移そう。江戸時代に、この神社に銅矛が所蔵されていることが記録されており、甕棺や銅矛鋳型も出土した。境内にも墳墓があった。熊野神社は、先ほどの王墓にほとんど隣接するから、王たちの祭祀に関連した神社と見なしてよいだろう。そこは王を葬るのにふさわしい場所だったのではないだろうか。

この地に吉武高木遺跡に対する飯盛山に当たる山を探してみよう。国土地理院の地図で見ると東に大城山がある。緯度を調べたら、熊野神社の位置は北緯 33.5390 度、大城山の三角点（410m）の位置は北緯 33.5381 度。熊野神社は、大城山を通る東西線に位置するのだ。その地にいた王は、春分・秋分の日、大城山の山頂に昇る日の出を拝んだのだろうか。

熊野神社を通る東西線を大城山よりも東に伸ばしてみても驚いた。宝満山（829m）がある。緯度は北緯 33.5398 度。熊野神社と宝満山は、十分な精度で同一線上にあるのだ。念のためにこの東西線を西に伸ばしてみてもっと驚いた。飯盛山がある。飯盛神社の上宮跡（約 337m）の緯度を測ると北緯 33.5375 度。こちらも同一線上にあるのだ。急いで吉武高木遺跡の“王墓”と建物の緯度も調べたら、北緯 33.5374 度である。すべて同一緯度線上にあるのだ。しかし、距離を測ってみると、熊野神社から、東に、大城山の山頂まで約 5.9 km で、宝満山頂上までは約 11.0 km。西に、飯盛山ま

で約 14.1 kmだが、途中におよそ 220mの油山の山すそがある。熊野神社から宝満山と飯盛山が見通せるだろうか（まだ現地に立っていない）。だが、大城山の山頂に立てば、宝満山と飯盛山の山容をはっきりとらえることができる。肉眼で直視することによって、三つの山が東西に一直線に並び、熊野神社がその東西線上にあることを確認できるだろう。

三つの山が緯度線上に一直線に並ぶのは自然の偶然である。その自然の不思議な符合をありがたく思えば、その東西線上に、墳墓を築くあるいは王宮を建てるという気持ちを起こすのを現代の感覚で笑うことはできない。熊野神社が絶妙の精度で三つの山と同一緯度線上にあるとすれば、最初に建てる時、観測を行なって場所を選んだのだろう。王はそういう奇しき場所で大城山と背後の宝満山に昇る日の出を拝むことができた。そして、そういう特別の場所に埋葬してもらった。こうして、陸上の「太陽の道」が明確な形として現われたと考えられる。琉球王による太陽の道の制定と同様にとらえることができる。

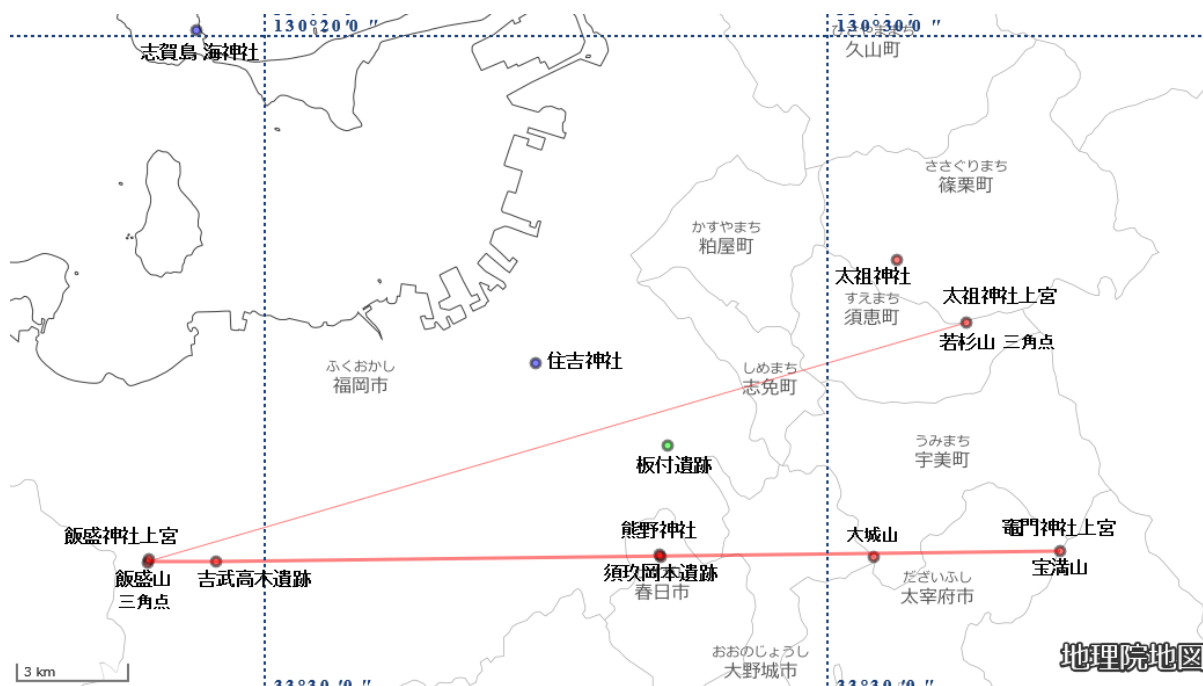


図4 吉武高木遺跡と須玖岡本遺跡を通る太陽の

重要なことをまだ述べていない。じつは、宝満山から約 400m 北東に 869mのピークがあって、三角点はそこに置かれている。最高峰でない峰が山の名を勝ちとっているのには理由がある。宝満山の頂上は、若杉山や飯盛山よりも高く、図3で示したほかのどの山をも圧倒する磐座になっているからだ。その頂上の磐座の上に龜門神社上宮の祠がある。この山は、山の形から御笠山とも呼ばれる。その西を西南に流れる川を御笠川という。山の形がかまどに似ているとして神社の名は龜門とされて、ふもとに龜門神社の社殿がある。この山には宝満山という漢語名がつけられているが、それは後代のことだろう。龜門神社の中宮のある中腹は愛嶽(おだけ)山と呼ばれる。宝満

山と呼ばれる前には山全体が「御嶽」だったにちがいない。この御嶽からなら、ゆうゆうと、遠く玄界灘の海原を見ることができ、その磐座に座って沖ノ島を見ながら遙拝することができる。博多湾岸の山々の中で、第一に挙げられるべき霊山なのだ。熊野神社は、そういう霊山である宝満山ともう一つの霊山飯盛山を結ぶ東西線の中に位置することで、博多湾岸で最も神聖な場所と主張できる。この地は春日という地名をもち、周囲にある古墳の一つは日拝塚と呼ばれる。熊野神社のそばに葬られた王は、太陽の道の下、春分・秋分の日、朝陽が射しこみ夕陽が照らす地に眠ったのである。

こう考えてくると、吉武高木に居住した“王”はこの東西線上にいたことを知っていたのではないかという疑問がわく。きっとそれを知っていたのだ。緯度の一致からして、もともと、飯盛山から見て春分・秋分の日で大城山に日が昇ることが認識されていたはずだ。だが、大城山のうしろにあるのが宝満山の磐座だと知られると、そちらの方が重要になっただろう。だから、飯盛山への日の入りを拝む場所というだけでなく、宝満山からの日の出を浴びることができるように、吉武高木遺跡のある場所に王の一族を埋葬し、“王宮”を建てたのだろう。

時代が進んで、人口が増え生産力が上がり、覇権の及ぶ領域が拡大して権力が強くなった後代、王家とその部族は、吉武高木の先例に倣って、この東西線の間あたりの須玖岡本に王宮を置くことにし、墳墓を配置し、熊野神社を建てたのだ。支配の制度は進化したのだろう。飯盛山のふもとの吉武高木ではイザナミ尊だけを祀り、イザナギ尊は博多湾岸の東側の若杉山に祀られていたのに、熊野神社はイザナギ尊とイザナミ尊の両方を祀る。王家は、身近に最高神を祀る社殿を建てて、自らの氏族の祖先の祭祀を執り行なうようにふるまったのだ。王はイザナギ・イザナミ夫婦神の子孫とする思想が育まれる。しかし、宝満山に日の出を拝み飯盛山に日の入りを拝む太陽の道との関係をどうつけていたのだろうか。宝満山の山頂とふもとで祀られている祭神は、玉依姫命、魂＝霊の憑りつく巫女なのだ。この神の名は一般名詞のように聞こえる。琉球王朝では、王の姉妹や娘が聞得大君となり、太陽神を斎場御嶽や王宮にある御嶽で拝礼した。御嶽に太陽神を明示する社殿はない。『三国志魏書東夷伝』は女王卑弥呼が鬼道につかえたとするから、この時代、ずっと古くからの伝統を守って、「魂憑り姫」が祭祀をつかさどるのが太陽の道で太陽神を祭るやり方だったのだろう。太陽神の宿る沖ノ島にも、太陽神自身を祀る社殿はない。代わりに宗像三女神の一人の社が置かれているだけだ。

博多湾の北にある志賀島で海の三神が祭られ、湾の南の浜辺で渚の三神が祭られている。前段で論じたように、この二つの神社はとても古い起源をもつ。イザナギ神を祀る若杉山の太祖神社の古さを証拠立てる遺跡があるか知らないが、最古の“王墓”の発見された吉武高木遺跡は真西に飯盛山を見上げ、飯盛神社はイザナミ神を祀る。須玖岡本遺跡には次の時代の王墓があった。そのかわらの熊野神社はイザナギ神とイザナミ神を祀る。この夫婦神が国々を産み、神々を産んだのである。二つの遺跡が時代の古さを証明する。『記・紀』の国産み・神産み神話の原型が博多湾岸でつくら

れたことは確実である。『記・紀』の記述では、大八島が日本列島西部に割り振りされているが、原型の説話では、聴き手が思い浮かべることのできる博多湾と糸島水道で見える島々だった、とわたしは想像する。八つあったのではないかな？

#### 4. 高祖連峰の西側の遺跡、第二の神話、太陽の道

##### 三雲南小路遺跡と細石神社

目を高祖連峰の西の平地に移すと、そこに弥生時代中期とされる三雲南小路遺跡がある。墳丘をもつ方形周溝墓に二つの甕棺が接して埋められていた。一方には剣・鏡・勾玉など、他方の甕棺の方にも「日之光…」という銘文入りの鏡のほか鏡や勾玉などが副葬されていた。王と妃の墓と推定される。この遺跡のすぐ南にも井原遺跡があったが、残念なことに江戸時代のことで十分学術的な調査ではなかった。二つの遺跡のすぐそばにある細石神社は被葬者（特に、ほとんど隣接する方形周溝墓の被葬者）と強い関係がある神社だろう。祭神は「木の花の咲くや姫」とその姉。細石神社の東方には高祖山の連峰がつらなりその山麓に高祖神社がある。こちらの立派な名をもつ神社の祭神は、木の花の咲くや姫の息子彦火火出見（ヒコホホデミ）命だ。

興味深いことに、高祖神社はほぼ高祖山と細石神社を結ぶ直線上にあり、“王と妃”の周溝墓はこの直線の延長線上にある（神話の説話を信じる人なら、被葬者は王と母后と言うかもしれない）。また、『前原市文化財調査報告書』の図に描いてある周溝墓自身の主軸もその方角を指しているに見える。昔は、高祖神社の神輿が細石神社に神幸していたらしい。実際、細石神社のある水系の地図を見ると、細石神社から高祖神社へおおよそまっすぐな道が東北東に伸びていて、この平地の道がすべてそれとほぼ平行である。細石神社・高祖神社・高祖山を結ぶ方向が特別の意味をもって、この社会はその基軸を尊重して発展したと考えることができる。その社会の時代の古さは三雲南小路遺跡が証拠づける。方角についての敏感さは、もう一つおもしろいところに表われている。二つの甕棺が北北東に向けて埋葬されていたことだ。吉武高木遺跡でも、王族の木棺・甕棺がみなその方向を向いていた。高祖連峰の両側で死者は北北東に向けて埋葬されたのだ。関連性があるだろう。

木の花の咲くや姫やホホデミたちを語る説話は具象性を帯びている。日子ホホデミは日子ニニギの命の子である。ニニギは、天照大神の孫で、地上を支配するために天下って来たとされる。ニニギの妻でホホデミの母木の花の咲くや姫は、大山積神の娘である。ホホデミは海（ワタツミ）神の娘豊玉姫と結婚してウガヤフキアエズ命をもうける。ウガヤフキアエズも海神の娘と結婚し、息子たちが大和に遠征して、戦いに生き残ったイワレヒコが大和の首長になった、と説話は語る。大山積神も海神も、博多湾岸で最初につくり出されたであろうことを前節で議論した。すると、沖ノ島にいる天照大神を除いて、ここに登場する人物たちも近くの地域にいたと考えるのが自然である。

天孫降臨の場所は、『記・紀』に書かれた説話を我田引水して各地で当地こそと主張される。しかし、説話に現われた母たちの親神が近くの地域でつくりだされたと、前節に論じたような信憑性の高い状況証拠を示して説明できる所は少ないだろう。何よりも、三雲南小路遺跡ほどの考古学的証言を引き出すことのできる所はないだろう。そして、『怡土志摩郡地理全誌』のような証拠を提出することもできないだろう。その書誌は、慶長のころ高祖連峰のふもとの櫛村で村名についての話に「クシフル山」の名が出ていることを記すが、『古事記』は、天孫降臨の場所を「筑紫の日向のクシフル岳」というのである。東南東の「日向峠」を越えれば、飯盛山のふもとを「日向川」が流れているから、このあたりを「日向」と呼べるかもしれない。ホホデミとその母を祀る高祖神社と細石神社のあるこの地が、ニニギから始まる説話と深くかかわっていると考えても大きな誤りではないだろう。

この説話はもちろん政治的な意味を帯びているだろう。説話でニニギが天照大神の孫とされるのは、三雲南小路遺跡に埋葬された王かその先祖が、祖先を天照大神に接続させたためだっただろう。須玖岡本遺跡に埋葬された王は、天照大神を産んだ最高神イザナギ・イザナミを墓のそばにある熊野神社で祀っていたことを思い出そう。こちらで王の妻となり母となった女性は、博多湾岸にいた山の神や海の神を奉じる氏族の出身だと考えてよいかもしれない。博多湾岸と怡土志摩の地域の氏族・部族たちが競いながら婚姻関係を結んだことを示唆する。また、ホホデミは「海幸・山幸」説話の山幸彦とされるが、兄との争いに勝ったとする説話は兄弟の継承をめぐる争いと見ることが可能だ。深入りすると論争に巻き込まれるのでやめておくが、この説話が博多湾岸と糸島水道の地域で生まれたことは確実だと思う。

### 平原遺跡 1 号墓が教える方位

糸島市で多くの遺跡が見つかった。今度は、三雲南小路遺跡の西側にある丘陵地の北部で発掘された平原遺跡を見てみよう。時代は弥生時代後期から晩期とされている。木棺を埋めた方形周溝墓（1 号墓、縦 14m×横 11m）から、直径 46cm もの国産の鏡を含む多数の鏡や勾玉と太刀が出土した。発掘に当たった原田大六は、柱穴が“東南”の日向峠を向いているとして、太陽信仰を力説し、副葬品が被葬者を女性と示唆するので、その被葬者をオオヒルメノムチ（天照大神の別名とされている）と関連させて独特の解釈を提出した。しかし、三雲南小路遺跡の時代にあれほど高祖山の方角を気にした地方である。須玖岡本遺跡よりも新しいとすれば、東西線を尊重する傾向が強まっていたのではないか、東の方角を考慮したのではないか、とわたしは考えた。

そこでまた地理院地図に相談した。地図は、平原遺跡が北緯 33.542 度にあり、高祖山の東南東 1.9km のところに高祖山よりも 3m 高く三角点の置かれた主峰があることを教える。その高地山（419m）の緯度は 33.540 度だ。狭い地域が対象なのに緯度の差は大きすぎるけれど、おおよそ東側に高地山がくるように、平原遺跡の被葬者たちはそこに埋葬されたのだろうか。高地山の西麓に櫛村がある。『怡土志摩郡地理全

誌』の言う「クシフル山」は、高地山のことだろうか。

ここまで書いてきて、頭の中でひらめくものがあった。方位を調べなければならない。もう一度地図を詳しく調べた。先ほど述べたように、細石神社と高祖山を結ぶ線を引くと、三雲南小路遺跡と高祖神社は十分な精度でその線上にある。この直線の方位は、細石神社を通る緯度線を基準にすると約 $-27$ 度だ。この角度は細石神社での夏至の日の出の方位約 $-29$ 度（図中に点線で示す）とくらべるとやや小さいが、ほぼ期待したとおりだ。[ここで言う日の出の方位は地平線上に顔を出す太陽の方位である。緯度と経度を指定して、海上保安庁海洋情報部の「日没出沒計算サービス」を利用して求めた。地平面を出た太陽は日本では南に傾いて昇るので、山の尾根から出る太陽は「日没出沒計算サービス」の示す方位から時計回りの方角にずれる。そのずれは山の高さによって違い、季節によっても違う。太陽の視直径が $0.5$ 度強あることも考慮する必要があるだろう。今の場合、高祖山は細石神社から近く、仰角が大きいので、夏至の日の出の方角はむしろ緯度線に対して $-27$ 度に近いだろう。以下で議論する夏至・冬至（春分・秋分）の日の出の方角も同様に考えなければならない]。

言葉で説明しても分かりにくい。図5に示す地形図が、一目瞭然事態を説明する。夏至の日の朝、細石神社から高祖山を仰ぎ見ると高祖山山頂付近の尾根から太陽が出てくるのだ。細かく言えば夏至の日に太陽が顔を出す位置は山頂からずれるだろうが、山頂を見通す線上に高祖神社を配置して、夏至のころの太陽の道を象徴的に明示したのだ、と考えることができる。三雲南小路遺跡の周溝墓の主軸と、細石神社から高祖神社までの道やほかの道がみな東北東に向いていた秘密が分かった。

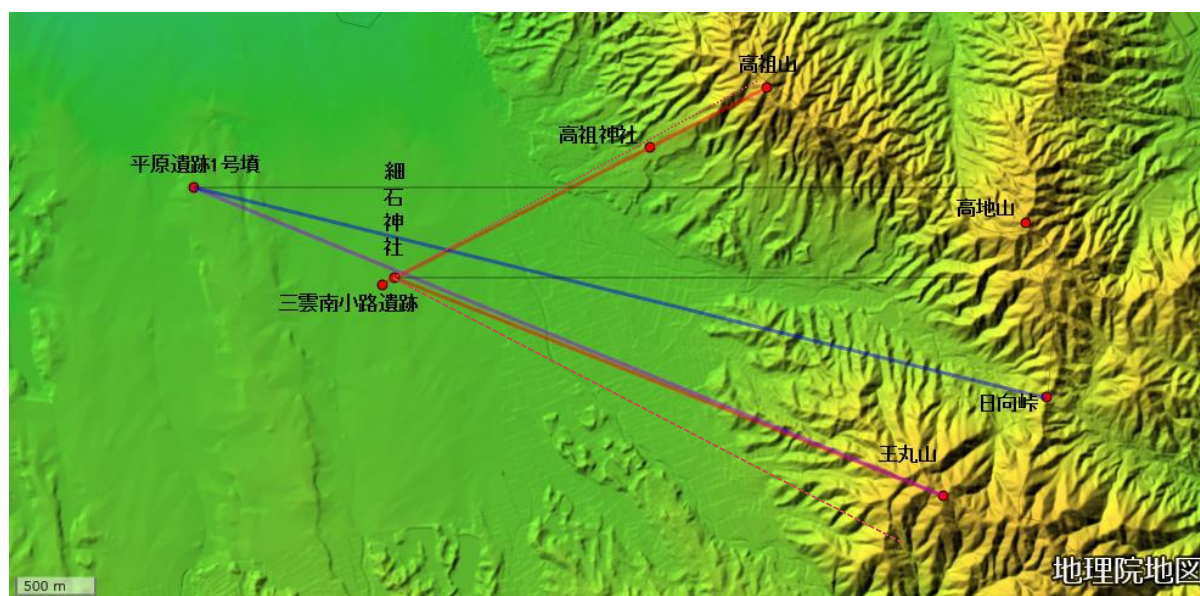


図5 三雲南小路遺跡と平原遺跡を通る太陽の道

さらに、ほかの線を引いてみた。目は、高地山が平原遺跡を通る緯度線よりも南にあることを感知するが、新たに、平原遺跡と細石神社を結ぶ線の延長上にある三角点

に気づく。名は王丸山、標高 453m で、日向峠の西南に位置する。細石神社から王丸山に引いた線は、緯度線よりも角度にして約 +22 度南に傾いている。冬至の日の日の出の方角 +28 度（図中に点線で示す）よりもかなり小さい。しかし、図 5 の王丸山の地形を見れば、冬至の日に細石神社に立てば、王丸山の広がった尾根から出てくる日の出を拝むことができる、と分かる。ところで、平原遺跡 1 号墓から王丸山山頂へ引く直線が緯度線となす角度は +22 度強あるけれども、それは精確な地図上で言えることで、細石神社はおおよそこの直線上にあると言えることができる。つまり、王丸山の山頂から来る朝陽は、細石神社を越えて平原遺跡 1 号墓へ射しこむのだ。むしろ、平原遺跡 1 号墓はそのような位置に築かれた、と考えるべきだろう。すると、細石神社は、高祖連峰の西側の平野で、夏至の日には高祖山から、冬至のころには王丸山から出てくる朝日を拝むことのできる（両方からの太陽光線が交差する）スポットに建てられたことになる。

わたしはこの発見に喜んだが、細石神社・夏至・冬至をキーワードにインターネットで検索してみると、夏至の日に朝日が高祖山から出てくることはすでに知られていることが分かった。至極当然のことではある、三雲の人は知っているはずだから。だが、冬至に触れた記事は見つからなかった。ここの水系の一番東の上流は東南東に発していて、その先に日向峠への道がある。そのことが日向峠の南側を高祖連峰の一部とする見方を弱くするのだ。三雲南小路遺跡について、考古学者たちは夏至と冬至をあまり意識しなかったようだ。

平原遺跡ではもう少し方位を問題にしている。糸島市教育委員会がインターネット上に示す平原遺跡の発掘図は、方位記号を示した上で、1 号墓の周溝・墓壙・木棺跡と、周溝の前方にあった大柱の穴と、後部にあった鳥居と推定される穴および大柱の穴を描いている。平原遺跡の場所で方位記号が示す磁北は、地理院地図によれば、子午線に対して -7 度 10 分傾いているので、1 号墓の指す方角を知ることができる（付記 2）。発掘図に描かれた“主軸線”の方向を分度器で測ってみると、緯度線に対して約 +12 度傾いている。しかし、よく見ると、発掘図に引かれた線は墓壙と木棺の主軸の方向からわずかにずれている。そこで、木棺と墓壙の主軸線を引いて、改めて角度を測ると約 +14 度あった。この角度は、地図上で平原 1 号墓から日向峠の分水嶺へ引く線が緯度線に対してなす角度約 +14 度とよく一致する。最初の発掘者原田大六が指摘するように、平原 1 号墓の木棺の主軸は「日向峠の方に向いている」のだ。考察がほとんど終わったころ、原田大六著『平原弥生古墳 上・下巻』を一瞥しその精確な図面をコピーする機会を得て、今述べたことが確認できた。もう一つの指摘「二の鳥居が高祖山に向いている」のは、細石神社から夏至の日の出を礼拝する習慣が高祖山を神聖な山にした、と解釈できる。

こうして、次のように結論してよいだろう。細石神社は、三雲南小路遺跡のあった地域で、夏至と冬至の「太陽の道」を象徴する高祖山と王丸山からの朝陽が交差する焦点に建てられた。そして、のちに築かれた平原遺跡でも最大の 1 号墓がそのことを

追認した、と。

地理院地図をていねいに調べてみたが、細石神社の位置から見ると高祖連峰だけが見えて、背後にある山は見えないようだ。一番標高の低い日向峠の先には二倍以上高い油山があるが、距離の近い日向峠が隠してしまう。ほかの方角でも同様である。このせいで、細石神社から見て、太陽は高祖山から王丸山にかけての高祖連峰を行き来しているように見えるのである。太陽信仰がつのれば、その高千穂を神聖視し、氏族の先祖が太陽に祝福されるその土地に来たという説話を語る者が出ないともかぎらない。そしていつか、祖先のニニギを太陽神の孫だとして神話の神に接続することも。その氏族は太陽神が祖先だと称することになるだろう。

インターネットで神社を検索すると、じつにさまざまな記事に出会う。そこに、神話と古代史についての主観的な解釈や主張が混ざり込む。わたしは、できるだけ客観的な方法で論拠を挙げて議論することに努め、次のような比喩を記すにとどめる。

地図を東が向こう側になるようにして水平にし、手前から見てみよう。細石神社は扇の要にあり、北側(左手)の端は高祖山に伸び、南側(右手)の端は王丸山に伸びて扇のように開いている。夏至の日に朝日は左手の端から昇って一年が始まり、扇の向こうの峰々で日ごとに太陽が顔を出す位置が南に移っていき、半年かけて右の端に至る。すると、太陽は復活して太陽暦の一年が始まり、朝日は毎日北に移動して夏至に至る。細石神社にいる木の花の咲くや姫は、この繰り返しを眺めながら年月を送るのである。三雲南小路の周溝墓に葬られた王と妃は、夏至の日に、細石神社と高祖神社を礼拝所として高祖山から出てくる太陽神を拝んだ。あとから築かれた平原の周溝墓の主は、琉球の聞得大君のように、細石神社を礼拝所として冬至の日に太陽神を拝み、もう二つの節目の日、春分・秋分にも、東に出る太陽神を拝む。

## 5. 「博多湾・糸島水道」沿海地域の太陽の道の全貌

### 「博多湾・糸島水道」沿海地域の太陽の道の全貌

二、三日して、木の花の咲くや姫が祖母のイザナミと並んでこちらを見て頬笑んでいるような気がした。孫娘と祖母はどこにいるのか。また、現代の神鏡とも言うべき黒い画面に国土地理院の地図を出してお伺いを立てた。

木の花の咲くや姫のいる細石神社の位置は北緯 33.5371 度、イザナミのいる飯盛神社上宮は北緯 33.5375 度（飯盛山三角点は 33.5368 度）だ。なんと、二人は同じ緯度線上にいる。ジグソーパズルのテーマが今や判明した。ここまでの考察は、高祖連峰の東側と西側を分けて考えていたので、この重要なテーマを見落とすことになったのだ。弥生時代の最重要な遺跡、吉武高木遺跡も三雲南小路遺跡も須玖岡本遺跡もみな同一緯度線上にあったのだ。宝満山と飯盛山がほとんど同一の緯度線上にあるのは自然の偶然だが、王たちが住居を構え埋葬地とするのに選んだ三か所が同じ東西線上に

あるのは偶然ではない。王たちとそれにつき従う人々が、ここまで論じてきた「太陽の道」という観念を共有していたことは確実である。繰り返せば、博多湾と糸島水道南の陸にある太陽の道は、宝満山御嶽と飯盛山を結ぶ東西線なのだ。

認識を新たにして見直せば、細石神社で夏至の日に高祖山から昇る日の出を拝み、冬至のころ王丸山に昇る日の出を拝んだとした前節の解釈は不十分だったことが分かる。細石神社は、何よりも、春分・秋分の日には太陽の通る道に建てられたのだ。飯盛山の緯度とあれほどの精度で一致していることがそのことを証明している。細石神社のスポットは次のように決定されたと言いなおさなければならない。北緯 33.54 度を通る東西線「太陽の道」上で、夏至の日の太陽が高祖山から出るように見える場所、と。そうやって選ばれたスポットは、冬至の日に王丸山山頂付近から太陽が昇るように見えるという要求を満たせなかったのだ（そんな偶然はめったにない）。冬至の日の出が王丸山山頂からかなりずれた尾根から出るのを大目に見るしかない。山全体を王丸山と呼んで冬至の太陽はそこから出ると考えたのだろう。

しかし、細石神社の場所からは飯盛山が見えない。それなのにあれほどの精度で緯度が一致しているということは、測量が行なわれたのだ。高地山に登れば飯盛山が見えるけれども、三角法で細石神社の位置を決定したと考えるのは行きすぎだろう。測量は、高地山の尾根に出て、飯盛山と大城山・宝満山が一直線に見える場所を探して鉛直な棒を立て、弓矢の狙いをつけるようにその前後に一直線に並ぶ棒を立てて尾根を下っていくような方法で行なわれたのだろうか。いずれにせよ、三雲南小路遺跡はそのぐらい測量できる文明の水準に達していたことを示している。

こう考えてくると、三雲南小路遺跡のそばの細石神社で、春分・秋分の日には真東にあるはずの飯盛山を遥拝し、夏至の日に高祖山に昇る朝日を、冬至の日には王丸山に昇る朝日を拝む儀礼があったとすれば、その先例は高祖連峰の東側にある吉武高木でもあったのではないかという考えに至る。吉武高木では、飯盛山に沈む夕日を拝む習慣が最初に生じたのだとしても、先に述べたように、真東にあって山頂に磐座をもつ宝満山御嶽を遥拝することが重要になっただろう。日の出を重視すれば、夏至や冬至の日の出を無視するわけにいかない。そもそも、それを見ることから年を数えることが始まって、太陽に注目する暦が発生し、方位の知識が生まれたのだから。

飯盛山の祭神がイザナミで、遠く若杉山の祭神がイザナギだと知ったとき、飯盛山から若杉山へ直線を引いたのではある。しかし、緯度線となす角度が小さすぎて方位に特別の意味はないように思った。だが、細石神社は王墓のそばにあった。吉武高木遺跡から線を引いたらどうだろうか。図 6 に示そう。太祖神社上宮のある若杉山の三角点（656m）へ直線を引いて緯度線からの角度を測ったら約 -18 度である。夏至の日の出の方角 -29 度よりもかなり小さい。だが、現に、若杉山は飯盛山と対をなす山として選ばれた。若杉山に代わって夏至の標識となる山はまわりにないから、吉武高木から遠く 21.6 km 離れたそちらの山全体を若杉山と呼んで、夏至の日の出の標識としたのだろう。

それでは、冬至の日の出を拝む山はどこか。その方角には油山がある。油山の尾根

は山頂 597m からおよそ北に向かって下っていく。三角点は山頂の北 600m ぐらいのところに置かれ、その標高は 569m である。吉武高木遺跡と油山三角点を結ぶ直線は、緯度線と約 +28 度をなす。冬至の日には吉武高木から見ると、太陽はおおよそその三角点付近から出ると見えるだろう。吉武高木の“王”は、春分・秋分の日には、宝満山からの日の出と飯盛山への日の入りを拝み、冬至の日には油山からの日の出を拝んだのだ。そのような場所を居住地に選び、そこを埋葬地とした、と言えるだろう。油山は、中心地である吉武高木を冬至の太陽の道が通ることを教える標識の役目を果たしたことになる。三つの目立つ山が春分・秋分と夏至と冬至の日の出の方角にあるということはなかなか望めないから、三雲南小路で、冬至の日の出が王丸山山頂からかなり外れることを我慢したように、吉武高木では、若杉山山頂が夏至の日の出の方角にないことを我慢したのだろう。

吉武高木でも三雲南小路でも春分・秋分・夏至・冬至に太陽の昇る方角が意識されたとすれば、当然、須玖岡本でもそれらの方位が大事にされたはずである。須玖岡本で夏至と冬至の太陽の道はどの山を標識としたのだろうか。熊野神社から緯度線に対して約 -23 度の方角に標高 828m の砥石山がある。しかし、三角点はその北 900m ぐらいのところにあり、標高は 774m、名はないようだ。こちらの方角は緯度線に対して約 -27 度である。砥石山を特別視する神社を見つけることはできなかった。若杉山にイザナギ神が祀っており、熊野神社にイザナギ・イザナミ夫婦神が祀っているので、こちらに祠や別の神を祀る必要はないということだろうか。図 6 を見ると、須玖岡本から望むと、大城山から北西に伸びる山並みにへこんだところがあって、ちょうど砥石山とその北の峰を見通すことができるようになっている。夏至の日、熊野神社の場

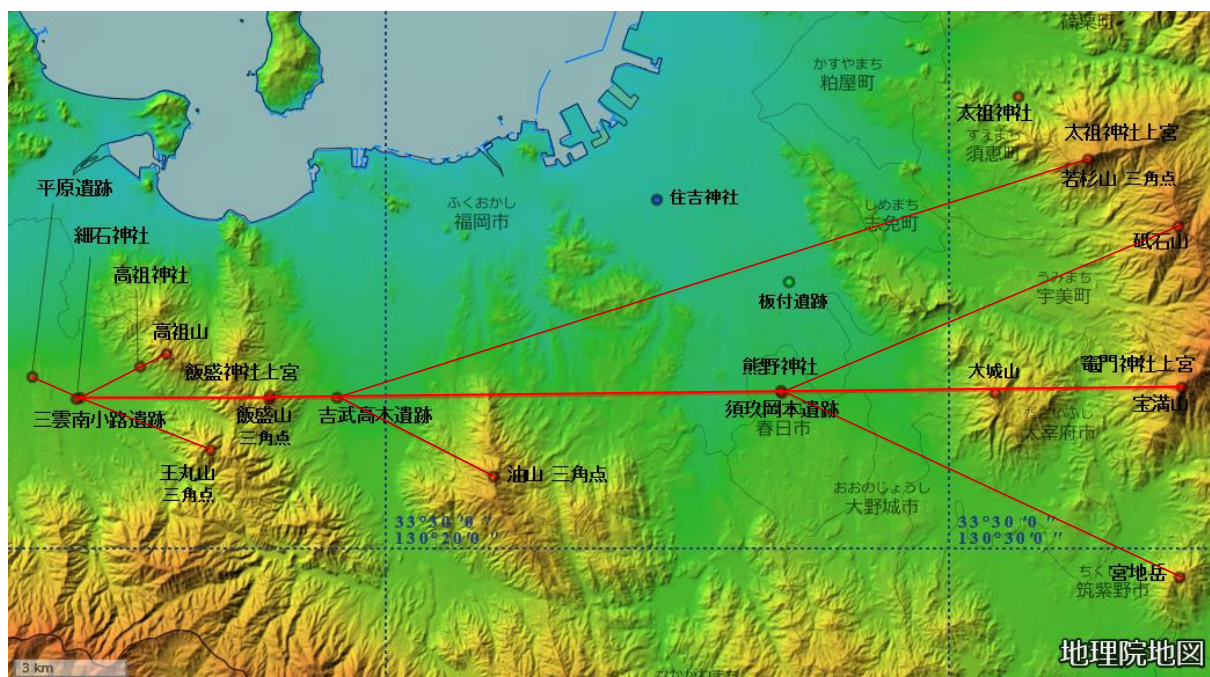


図 6 須玖岡本遺跡・吉武高木遺跡・三雲南小路遺跡を通る太陽の道

所から砥石山の北の峰あたりに昇る日の出を拝むことができたはずだ。須玖岡本の人々にとって何かの計らいのように思えたかもしれない。

冬至の日の出を見る方角には独立峰として山塊をなす標高 339m の宮地岳がある。熊野神社と宮地岳山頂を結ぶ線が緯度線となす角度は約+25 度である（この線上に太宰府政庁跡がある）。冬至の日の出の方角+28 度よりも少し小さいが、冬至の日の太陽は独立峰をなすこの山から昇るのである。熊野神社と宮地岳のあいだにはさえぎる山がなく、冬至の日の出を直視できる。こちら、須玖岡本の人々に自然のありがたい恵みのように思えたことだろう。この山から熊野神社へ射しこむ冬至の朝陽が太陽の道を指定するのである。宮地岳という名がそのことを証言している。

三つの方角にちょうど適当な山が三つあることはなかなか望めない。須玖岡本はそういう条件を満たしたのである。王が宝満山と飯盛山を結ぶ春分・秋分の太陽の道上に居所を選ぶとしたら、夏至と冬至の太陽の道もうまく指定できる須玖岡本が最もふさわしかったと言える。ここからなら、冬至の日に太陽が沈む油山も見通せる。そして、春分・秋分には熊野神社から、吉武高木の王のように、飯盛山に沈む日を遥拝できたことはもちろんである。

図 6 をもう一度見てみよう。ジグソーパズルのすべてのピースがきれいに納まった。出来すぎと思えるほどだ。三つの遺跡を中心とする太陽の道をすべて同時に書くとよけいにそう見える。しかし、三つの遺跡は時代を異にする。吉武高木の首長たち、三雲南小路の王たち、そして、須玖岡本の王たちは異なる時代に異なる視野で太陽を崇拝していたのである。ただし、最も重要な緯度線に沿う太陽の道を共有して。それら三代の王族の首長権の継承がどのようなものだったかは、歴史解釈に踏み込むことになるので、本稿では考えないことにする。しかし、宗教・文化などを共有していたことだけは確かである。

ここまで言う機会をのがしたことがある。なぜ吉武高木・三雲南小路・須玖岡本であれほど春分・秋分・夏至・冬至の太陽の道を設定することに熱心だったのだろうか。その答えは、三雲南小路の細石神社と須玖岡本の熊野神社が春分・秋分・夏至・冬至の朝陽の射しこむスポットだということにあるだろう。きっとそこで、冬至・春分・夏至・秋分の日には太陽を礼拝する祭事が行なわれたのだ。あれほど鏡が珍重されたのも、祭事で太陽の光を映す祭器として必須のものだったからにちがいない。そのスポットで、冬至・春分・夏至・秋分のたびごとに祭壇をもうけて祭事を執り行なったのだろう。そこは神聖な場所となり、祭壇が常設されるようになって、やがて、社殿となり、のちの神社になったと考えることができる。現代の神社でも神の形代としてたいてい鏡を置いているのはそのなごりだろう。

その祭事を主宰したのは王で、祭祀を行なったのは卑弥呼のような王家の女性だったのだろう。形成された信仰体系において冬至・春分・夏至・秋分の祭事が中心的な意味をもち、王の住居はその神聖なスポットの付近に置かれたと考えられる。信仰は、また、王族にその近くに埋葬されることを願わせたのだろう。こうして、発見された吉武高木遺跡・三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡ができたと考えることができる。中心

軸を指定したのは山頂が磐座の宝満山で、宝満山と飯盛山を結ぶ東西線が王都の場所を規定したのだ。念のために言えば、外形的な標識から見つかった方位線を太陽の道と名づけたのは現代人である。そうして、太陽の道という言葉で象徴的に表現できる古代の太陽信仰の一端が見えるようになったのである。

三つの遺跡を通る太陽の道は、その宗教儀礼が鏡を副葬した“最初の王”の墓が見つかった吉武高木遺跡の時代からあったことを証言する。発掘では見つからなかったようだが、吉武高木でも同様の祭事を行なった場所があったと考えられる。その祭壇（社殿）は歴史の流れの中でうずもれて、中世の神仏習合の時代に飯盛山のふもとに飯盛神社として建てられたのだろう。飯盛神社は昔の太陽の道の上にはない。

本稿を推敲しようとするころ福岡に出かける機会があつて、四つの遺跡の現地を見学した。今では、みなきれいな公園に整備されている。

まず、須玖岡本へ行き、熊野神社と王墓跡、それにドームで覆われた二つの古墳がほぼ丘陵の頂きにあることを確認した。そして、熊野神社から真東を見た。あいにくもやがかかっていて、ここに示すことができるような写真を撮れなかった。しかし、肉眼で宝満山の特異な見え方を把握することができた。宝満山は約 400m 北東にあるピークから南西に下っていく尾根の途中にある。見慣れた人でなければ、遠くから宝満山がその尾根のどこか言えない。実際に熊野神社から見ると、大城山の尾根は山頂から左へゆるやかに下っていて、奥の宝満山の尾根は左から右に下っていく。ここで、大城山山頂(410m)が北緯 33.5381 度、宝満山(829m)の磐座が北緯 33.5398 度、熊野神社は中間の北緯 33.5390 度、そして、熊野神社から大城山山頂まで約 5.9km、宝満山まで約 11.0km あること、また、緯度の差 0.001 度は南北の距離にして約 111m に当たることを思い出そう。新たに調べたところでは熊野神社は 34m の丘にある。この位置関係なら、宝満山と大城山山頂はほぼ同じ高さに見えるはずだから、今見えている手前の大城山山頂左の稜線と奥の宝満山の稜線が交差するへこんだところの左側が宝満山の磐座ということになる。西にあるもう一つの飯盛山が見えるかどうかは建物や木々に隠されて確認できなかった。

吉武高木遺跡では、農道の下に埋め戻された王墓の上に立って真東を見た。その場所は北緯約 33.5374 度にあるから、熊野神社からの見え方とわずかに違うはずだが、眺めが遠くなっただけでその違いはよく分からなかった。ここから、大城山山頂は約 18.1km の距離で緯度にして約 0.0007 度北にあり、宝満山は約 23.2km のところで緯度にして約 0.0024 度北にある。この位置関係でも、宝満山の磐座は宝満山の稜線が手前の大城山頂上の稜線と交差するくぼみの左側にあることにはかわりはないだろう。吉武高木から東方の三郡山地を遠望して得たもう一つの収穫は、若杉山と砥石山のピークはよく識別できることが確認できたことである。

三雲南小路遺跡と平原遺跡から見る高祖連峰は近くにあつて、そこに暮らした古代人にとって身近な山だったことが分かる。ゆかしい名をもつ細石神社はいかにも小さな集落の社というたたずまいだ。ここでかつて王が主宰する太陽の道の祭事が行なわれたことなど忘れられて久しい。

## 神話解釈の試み

太陽信仰にまつわる観念は、歴史を重ねて体系化され普及していったと考えられる。人々は習慣的にその観念に基づいて考え行動するようになっただろう。ここまで見てきたことだけでも、語られる神話に微妙な変化を読みとることができる。

吉武高木遺跡の時代、飯盛山のイザナミと若杉山のイザナギ、それに宝満山の玉依姫は、山の頂上にいるとイメージされたのだろう。頂上を結ぶ三角形を見上げれば、その上の天空は高天原である。そして、山頂が磐座の宝満山が太陽神の宿ると見なされた沖ノ島を遥拝する御嶽となって、沖ノ島の上に広がる空は若杉山・飯盛山・宝満山の上の空に接続され、その高天原でイザナギ神・イザナミ神と太陽神との連結がなされた、と考えることができる。イメージをふくらませて、説話はそういう高天原の物語を語ったのだ。

三雲南小路では、細石神社に木の花の咲くや姫、高祖神社にホホデミを祀っている。説話で語られる人物はより人間的になる。高天原から降りて来た地上での物語である。

『記・紀』神話は高天原から降りて来たのはニニギとするが、糸島でホホデミを高祖神社に祀るのは、ここではニニギの子とされるホホデミを王祖とするのだろうか。

須玖岡本では、熊野神社に神話上の始祖神ともいべきイザナギ・イザナミがいっしょに祀られている。もう少しさぐってみると、冬至の太陽の道の通る宮地岳の南麓、天山という地区に高木神社がある。祭神は高皇産巢日(たかみむすび)神＝高木神だ。

『古事記』神話の語り初めに登場する三神の一人で、生成力を神格化したような抽象的な神である。そういう神が、天孫降臨説話で天照大神とともに命令を下す重要な役割を果たす。その理由のように、ニニギは天照大神の息子と高皇産巢日神の娘とのあいだに生まれたとされている。須玖岡本の王が宮地岳にこの神を祀る社殿を置いたのだとすると、イザナギ・イザナミに加えて高皇産巢日神をも祀ったことになり、太陽の道の主神はもちろん天照大神だから、重要な神をみな祖先神としたかのようだ。時代とともに理論化が進み、権力の増大が王権神授の神話をふくらませたのだろう。地上での王祖を中国でのように宗廟に祀ったと考えられるが、それが誰だったかはよく分からない。しかし、神話の本筋からして、また高皇産巢日神を祀ったことからしても、王祖をニニギとした可能性が高い。

三雲南小路遺跡のところで、祖先をニニギとして太陽神に接続し高千穂に降りて来たとする説話は、そこで生まれたかのように考えたけれども、それは須玖岡本で整理されたと考えるべきなのかもしれない。いずれにせよ、ニニギを祖先と称する氏族は太陽神を祖先神とすることになる。イザナギ・イザナミの二神を祖先神とすることと太陽神を祖先神とすることには、差異があるように思われるが、太陽神はイザナギの子とされるからつじつまは合っていたのだろう。ニニギは地上での高祖あるいは太祖に当たるけれども、若杉山のイザナギ神を祀る神社が太祖神社と呼ばれ、三雲のホホデミを祀る神社は高祖神社と呼ばれる。祖先神と王祖を漢語でこのように区別したの

だろうか。

ニニギが高天原から天下ったとされるクシフル岳を、先には、高地山よりも飯盛山とした方がよさそうだと考えたけれども、それは、三雲南小路を中心とする見方である。目を高祖連峰の東側に転じれば、朝陽が射し夕陽が照らすもっと広い平地があり、高祖連峰よりも高い三郡山地が東方に連なる。宝満山・若杉山・飯盛山の山上を結ぶ三角形の上に広がる高天原から降りてくるとしたら、最も高くて山頂が厳かな磐座である宝満山の方が、筑紫の日向（ひむか）の高千穂のクシフル岳にふさわしいように思えてくる。ここから説話にバリエーションが生じたと考える方がよいかもしれない。勇み足を覚悟でさらに言えば、イザナギが黄泉の国から帰って若杉山に落ち着いたとすると、みそぎをした「筑紫の日向のたちばな」は、若杉山北西の海に向かって突き出た立花山ではないかとも思える。その海岸の地形図は海拔 0m 近くの低地を示し、古代に小門(おど)と呼べる水門のようなところがあったと示唆する。

神々を考えれば議論があいまいになってしまう。閑話休題。

## 6. 宗像地域の太陽の道

議論を宗像大社に戻すために、博多湾岸の北側に向かおう。こちらの沿海部も博多湾岸の発展と歩みを共にした地域だろう。宗像大社の西側には、100m級のピークがいくつかある山並みがおおよそ南北に連なり、対馬見山（243m）を最高峰として、宮地嶽神社がある所まで続いている。対馬見山の西側の地形は、古代には海岸が山のふもと近くまで迫っていたことを教える。その海岸近くの南北にいくつかの古墳が並んでいる。その西に、昔は島で今では陸続きになったと見える所がある。しかしそこは陸地から近すぎて、海に浮かぶ島に夕陽が沈むのを拝む対象にはならなかったようだ。宗像大社の北西、神湊の先は小さな岬になっていて、すぐ沖合に勝島があり、その向こうに大島がある。その方角に太陽が沈めば、地先から沖の島に沈む太陽を拝む絶好の場所になったことだろう。ところが、岬から二つの島へ伸ばす直線は北西方向に向かい、その方向に太陽は沈まない。神湊の東北に、北西の沖合にある地島を眺めることのできる地先があるが、やはり、夕日を拝むのには適さない。宮地嶽西方の海岸の防風のための松林は、博多湾の北を限る海の中道の付け根まで続く。こちらの海岸も、対馬見山の西側に似た平地である。その海岸に、宮地嶽ほど太陽の沈むのを眺めるのに適した場所はない。そういうわけで、神湊から海の中道までの長い海岸で、夕日を礼拝するスポットになったのが宮地嶽神社のある小山である。この小山は、古い時代から、日本列島にあった海に浮かぶ島に太陽が沈むのを礼拝する「御嶽」になったものと思われる。

そこから見える島の名は相島（あいのしま）。地先の島がたいてい「おお島」とか「あお島」と呼ばれる通例に反しているが、神湊の沖の大きい島に大島と名がついているから相島と呼ばれるのだろう（ほかの地方でもそういう例がある）。相島は、宮地嶽から西南西に 11 km 余り離れたところ、宮地嶽神社の参道の延長線上にある。この

直線の方角は緯度線から約 $-12$ 度。真西に向いていないから見劣りすると言うなかれ。十月に宮地嶽神社に登る石段の一番上に立てば、見事な光の道を見ることができる、と神社が宣伝している。実際、写真はそのことを示す。石段から1.4 kmまっすぐに松原まで道が続き、その先に見える海の向こうの相島に太陽が沈むのである。道は文字通り「太陽の道」となって、太陽の光がその上を通ってくる。その道は、浜の砂を採るお汐井とりのために、昔からその方向につくられていただろう。言いたいのは、初期の太陽の道はそれぞれの地方に応じてさまざまなあり方をしたであろうということ、そして、宗像大社のあるこの地域の太陽の道は宮地嶽を通っていたということである。須玖岡本の冬至の太陽の道の標識である宮地岳が同じ名なのは偶然ではないだろう。昔は宮地嶽と書かれていたのではないか。

宮地嶽神社のある小山の後部に直径34mの大きな円墳がある。日本列島では九州で始まった横穴式石室は奈良盆地まで広まったが、そのうちでも最大規模の石室をもつ。いくつもの副葬品が国宝に指定されている。築造は500年代、石室の石は相島から運ばれたと推定されている。今では、長さ22mの石室は何かの祠とされていて、入り口に社殿が建てられている。その社殿の方向からすると、石室の主軸は相島の方向に向いていると推測される。古墳はこの地方の太陽の道を拝む宮地嶽につくられ、被葬者の葬り方もそれを尊重しているように見える。三雲南小路遺跡に葬られた王と妃が細石神社を通して夏至の太陽の道を礼拝したように、ここの被葬者も宮地嶽神社を通して相島へ向かう太陽の道を礼拝していると考えられることができる。

現在、沖ノ島の祭事を執り行う神社は宗像大社である。宗像大社は、大島・沖ノ島と直線に並ぶ。大島には御嶽（み嶽）と呼ばれる山があってそこで祭祀が行われる。その線上の沖ノ島手前には三つの岩礁があって、夫婦岩あるいは鳥居の役目を果たすようになっている（この三つの岩礁も世界文化遺産の付帯物とされたそう）。しかし、序説ですでに述べたように、この方角からは太陽が沖ノ島に沈むようには見えない。宗像大社が沖ノ島の祭事を行なうようになった理由があるとすれば、そこが九州北岸で沖ノ島に最も近く、沖合にある大島の御嶽（214m）に登れば沖ノ島が見えることだろうか。しかしそれだけでは、ここまで見て来た日の出・日の入りを礼拝する太陽の道の必要条件を欠いている。わたしは、「沖ノ島は太陽神の宿る島だ」という観念の確立したあと、各地に社殿をもつ神社がつくられるようになった時代に、宗像大社を沖ノ島の遥拝所とする理屈づけをしてここに建てられたのではないかと推測する。

宮地嶽古墳に埋葬された被葬者はこの地方の有力者だろう。その有力者が、500年代になっても、昔からの宮地嶽と相島を結ぶ太陽の道を尊崇してそこへ埋葬されることを望んだのだ。すると、その時はまだ、宗像大社から沖ノ島の太陽神を遥拝することが始まっていなかったのではないか、という疑念が生じる。この問題は、稿を改めて考えることにしよう。

## 7. 結論

考古学的事実を根拠に地理上の事実を援用する以上の議論から、次のことが明らかになった。すなわち、古代、沖ノ島をとりまく本州西岸・九州北岸・壱岐・対馬の沿海部で、太陽を崇拝し、春分・秋分の日の出と日の入り、夏至・冬至の日出の方位を聖別し「太陽の通る道」として尊重したことである。具体的な要点を以下に箇条書きしよう。

- A. 沖ノ島を太陽の宿る島と見なして、沖ノ島を通る緯度線が春分・秋分の「太陽の道」として聖別された。
  - 日の入りを遙拝する長門二見が浦の夫婦岩と背後の狗瑠孫山御嶽、および、日の出を遙拝する対馬根緒の神ノ島がその標識である。
  - これは、琉球の首里城から太陽神の宿る島久高島を遙拝する形式に一致する。日の出を斎場御嶽で礼拝し、斎場御嶽下の渚には夫婦岩に当たる三つの岩があり、日の入りする島を神山島と呼ぶのも対応する。
- B. 日本の考古学で重要な吉武高木遺跡・三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡は同一緯度線（北緯 33.54 度）上にある。この聖別された緯度線を決定しているのは二つの霊山宝満山と飯盛山で、直列する三つの遺跡は、王宮と王墓が意図的にその東西線上に築かれたことを証言する。春分・秋分に、宝満山に昇る日の出と飯盛山に沈む日の入りを礼拝する「太陽の道」がここにあったのである。
- C. 上記のそれぞれの遺跡がある場所からは、夏至と冬至のころ太陽の昇る方角に標識となる山があって、春分・秋分の太陽の道に準ずる尊崇をうけた。
  - 三雲南小路には、春分・秋分、夏至、冬至に、三つの太陽の道を礼拝する細石神社が置かれた。そこから、夏至の日に高祖山に昇る朝日を拝むことができ、その線上に高祖神社がある。冬至の日には、東南東にある王丸山に昇る日の出を拝んだ。
  - 吉武高木では、夏至のころ太陽の昇る方角にあるのは若杉山で、冬至の日に太陽の昇る方角にあるのは油山である。
  - 須玖岡本では、夏至の日に太陽の昇る方角にあるのは砥石山の北の峰で、冬至の日に太陽の昇る方角にあるのは宮地岳である。
- D. 平原遺跡 1 号墓は、そこから三雲南小路遺跡そばの細石神社を望めば、その先に王丸山山頂を見通すことのできる場所にある。細石神社を焦点とする夏至の太陽の道の標識である高祖山を 1 号墓から拝んだらしい痕跡がある。
- E. 三雲南小路遺跡と須玖岡本遺跡のそばにある細石神社と熊野神社は春分・秋分、夏至、冬至の三つの太陽の道の交差するスポットにあり、そこで季節の節目に太陽崇拝の祭祀が行なわれたことを示唆する。ここには、祭祀の形式や神社の発生を考察する糸口があるだろう。
- F. 宗像地域には、宮地嶽から沖合の相島に沈む夕日を拝む太陽の道があった。これは現在も嘆賞されている。この太陽の道は緯度線から少し傾いているが、この地域で尊崇を集めていたことは、宮地嶽神社の後部にある破格の横穴式石室をもつ

古墳が証言している。古墳の石室の主軸はその太陽の道の方向を指している。そういう宗像地域に沖ノ島の祭事を行なう宗像大社があるのだが、宗像大社から大島・沖ノ島へ伸ばす直線は緯度線と50度もの角度をなし、沖ノ島に太陽が沈むように見えることはない。なぜ宗像大社が沖ノ島の神事をつかさどるのかという問いが生じる。この問いは答えられなければならない。

結論B・C・Dは、これら四つの遺跡の理解に関係し、古代日本列島での国の成立とその進展を明らかにするのに重要な光を投じることになるだろう。

上記遺跡の場所と春分・秋分・夏至・冬至に朝日の昇るもしくは夕日の沈む山には神社があって、その祭神は『記・紀』神話でも最重要な神々である。すなわち、吉武高木で夕日の沈む飯盛山には飯盛神社があり主神はイザナミ、そこから夏至の日の出の方向にある若杉山には太祖神社があり主神はイザナギ、三雲南小路遺跡に隣接する細石神社の祭神はニニギの命の妻である木の花の咲くや姫と姉の磐長姫、そこから夏至の日の出の方角の高祖山の山麓にある高祖神社の主神はニニギの命と木の花の咲くや姫の息子であるホホデミの命、須玖岡本遺跡の王墓に隣接する熊野神社の祭神はイザナギ・イザナミである。須玖岡本から冬至の日の出の方角にある宮地岳のふもとにある高木神社の祭神は高皇産霊神である。太陽の道の標識となる山の中で最も高く山頂が立派な磐座である宝満山の竈門神社の祭神は玉依姫である。これらの神々の配置と祭祀のやり方を見ると、次のような理解に導かれる。

- a. 『記・紀』神話の原型となる説話は、沖ノ島をとりまく本州西岸・九州北岸・壱岐・対馬、および、日本古代史で重要な上記四つの遺跡のある博多湾・糸島水道の沿海域でつくられた可能性が高い。
- b. 『記・紀』神話で国を産み神を産んだとされるイザナギ尊・イザナミ尊は、三郡山地と高祖連峰で区切られる博多湾岸でつくられた可能性が高い。
- c. 太陽神天照大神は、太陽が沈むあるいは出てくると見立てた沖ノ島を通る「太陽の道」崇拝と結びついてつくられた、と考えられる。
- d. ニニギ命の妻と息子が細石神社と高祖神社に祀られている。高天原から天下ったあとの説話が高祖連峰の西側で定着したことを表わすだろう。
- e. 時代が新しいと考えられる須玖岡本遺跡そばの熊野神社では、吉武高木遺跡の時代に別々に祀られていたイザナギ・イザナミがいっしょに祀られている。祖先神として祭祀を行なうように変化したことを示唆する。

四つの遺跡にかかわりのある神社に太陽神は祀られていない。太陽神の居場所は沖ノ島と定まっていたと考えられる。宝満山は陸の太陽の道の原点に位置して山頂の磐座から太陽が姿を現わす霊山だが、沖ノ島を見晴らすこともできる。そこは、琉球の斎場御嶽と同様に、太陽神に対する祭事を行なう御嶽だったと考えられる。その御嶽には、神というよりも太陽神の憑依する巫女である玉依姫がいたと考えるのが合理的だろう。このことは、宗像大社の問題を解明するのに関係するだろう。

## 付記

2017 年 12 月 22 日、実際に冬至の日の出を見るために細石神社に出かけた。あいにく雲があつて尾根から顔を出す日の出を拝めなかった。太陽が見えたのは 7 時 45 分ころで、すでに王丸山の尾根を離れて予想したあたりよりも南に見えた。地平線に出てくる太陽が南に傾いて昇るのを無視できないことは分かっていたのに、水平面上での日の出の方位しか知ることができなくて、本文の議論はその補正を無視したものになった。実際は、山がちな日本で日の出・日の入りを見れば、山の高さに依存してその方角は南にずれるのだ。改めてインターネットで探して、太陽の高度と方位を計算してくれる CASIO の keisan サービスを見つけた。それによれば、細石神社の場所（緯度と経度で指定）でこの日 7 時 45 分に見える太陽の高度は 3.95 度、方位は 121.44 度（緯度線に対して +31.44 度）とある。本文に冬至の日の出の方角を緯度線に対して +28 度と書いたのは荒い議論だったのだ。細石神社から王丸山は遠くない。太陽は仰角 3 度前後ある尾根から顔を出して、日の出の方角はおおよそ +31 度程度だったのだろう。より垂直に近い角度で昇る夏至の日の出でも方角のずれは無視できない。keisan サービスによれば、2017 年 6 月 21 日の 5 時 45 分で太陽の高度は 5.94 度、方位は 65.65 度だ。高祖山山頂(416m)は細石神社(42m)から 2.7km と近距離にあるので仰角はもっとあるだろうから、細石神社から見る夏至の日の出は高祖山山頂よりも南にずれるだろう。須玖岡本でも、熊野神社(42m)から約 5.9 km の距離にある大城山(410m)に出る春分・秋分の日の出は真東よりも南寄りに見えるだろう。本文に書いた日の出の方角は、誤差が大きくて、目安にすぎなかったことが分かる。しかし、それぞれの山全体をその名で呼べば、それぞれの山が春分・秋分・夏至・冬至の日の出の標識だということは変わらない。そして、宝満山と飯盛山を結ぶ東西線は、日の出・日の入りの詳細な見え方とは離れて、測量によって確認された“理論的な太陽の道”ということになるだろう。

## 付記 2

改訂前の稿で、平原遺跡 1 号墓の発掘図に書き入れられた方位記号を子午線の方角と誤解して、1 号墓主軸の方角について誤った議論を展開した。それを本稿で訂正した。訂正箇所は、本稿 19 ページ下方の二つの段落（元の 19 ページ最後の段落から 20 ページ最初の二つの段落）と、結論 D の部分である。その下にした平原 1 号墓の発掘調査に対する誤解に基づく一文を陳謝して撤回する。東海大学北條芳隆さんとのメールのやりとりのおかげで、この誤解に気づくことができた。感謝したい。

## 参考文献

参考文献として挙げることのできるのは、手元にある『知られざる古代』（水谷慶

一著、日本放送出版協会)、『古事記』(岩波文庫)、『日本書紀』(岩波書店、日本古典文学大系)だけである。あとの情報源は、インターネット上に記載された記事で、主としてウィキペディアを利用した。また、遺跡のある市の教育委員会がインターネット上に掲示している広報記事などに依拠した。遺跡の調査報告書はまだ見ていない。これでは参考文献のリストとして不十分すぎ、また、先行研究者への敬意も足りないことは、物理学者のはしくれであった筆者にはよく分かっている。小さな図書館しかないなか住まいの条件がそうさせたのである。どうか御容赦をお願いします。しかし、インターネット上の情報に錯誤があったり主観的解釈や付加物が混ざり込んだりすることを知っているので、情報のとりあつかいには十分に注意した。できるだけ、動かせない事実だと考えられるデータだけを採り上げて、それらを論拠に客観的に議論したつもりである。

国土地理院の地図を用いて考察し、神社などを探すのにグーグル・マップも利用した。図1から図6は、地理院地図を加工して作成したものである。夏至・冬至の日の出・日の入りの方角は、海上保安庁海洋情報部の「日月出没計算サービス」を利用して求めた。

最終稿を仕上げる前に、福岡市図書館で原田大六著『平原弥生古墳 上・下巻』を一瞥し、平原1号墓の発掘図から墓壙・木棺の主軸方向と墳丘の向きを求めて、議論に加えた。

---

本稿は、ホームページ「蝶の雑記帳」 <http://www.hakkoan.net/CCP005.html>  
第64話のpdfファイルを開けば読むことができます(pen name: 谷川修)。  
どうぞ、ご批評を [hsgw\\_kaicho@rd6.so-net.ne.jp](mailto:hsgw_kaicho@rd6.so-net.ne.jp) へお寄せください。